この歴史から創造への轉廻ならびにこの創造に於ける教育固有の立場及びこの立場に於ける歴史の教育的意義は山頂に登つて四方を見渡し得るもの丶如く吾々の一時に解決し得るところでなければならぬ。

余は前に『認識と教育』に於て認識の立場から教育を論じ教育の本領は結局斷言命令に立つものであると論斷して置いたが、これは既に認識の立場から歴史の立場に轉廻して教育を論じて居るのである。いふまでもなく批判哲學によつて認識の方面から教育の基礎を決定せんとするときは認識が課題である限りこの方面に於ける教育の無限進歩を承認せねばならぬが、吾々はこの認識を以て課題とする論理を反省して本來の我の立場に立ち歸つて往くときは體驗の立場に出でて、自然から轉廻して歴史を考ふべき立場に達する。こゝに初めて人格及びその教育は具體的に考へられるのであるが、吾々はこの歴史の本來的立場我の自由の斷言命令に立つときに歴史の絶對性を得られると共に教育も亦絶對性に達する。こゝでは教育は現在絶對の價値を信ずる無限進歩の歴史創造の活動である。如何なる特殊史でもない。歴史一般、普遍史を創造する活動である。この創造活動に至つては吾々は最早何の理由をもゝたぬ。全く超論理の非合理性の絶對的創造である。唯一つの個性が純粋なる創造活動に於て無數の絶對的個性を創造し無限價値の具體的歴史を作る。隨つて教育はその連續的進歩の各階段に於て現在個性の絶對性に基いてその活動に絶對的價値を感じつゝ無限に進歩すべき歴史創造の活動である。フイヒテの純粋事行が教育の性質を最もよく語るものである。教育は所謂双極作用であつて教育者が被教育者に影響を與へるにあるは勿論であるが、この教育者も被教育者も共に教育上に於ては絶對的個性たることを要求する。教育者が絶對的個性として無限價値の個性の歴史を作る創造活動の中に於て被教育者は又自己の絶對的個性を發見しその個性から又無限の個性としての具體的普遍の歴史を作る時にのみ本來の意義に於て教育が見られる。教育者が個性の絶對に立ち被教育者の個性の絶對を承認し、被教育者は又その絶對の個性から絶對の個性史を作るとき教育の絶對性があり本質がある。教育は所詮個性の絶對活動である。こゝに教育の態度の獨立性もあれば又價値の客觀性もある。絶對的に一致せる立場に立つて絶對的に異なれる方向に進んで往くのが教育であるといへば不可思議の樣ではあるが、二律背反を解決せる斷言命令の個性の教育ではこれが眞理であつて、こゝでは只神のみが神を知るといつたやうな意味で絶對の個性が絶對の個性を作り具體的價値の普遍史を作る。只端的に具體的普遍と呼ばるべき唯一の歴史を作るを得る。我の本來に於ては個性の絶對的創造活動であつて、こゝでは創造といふ外何物もない。我を作るといふことが唯一の我であり、教育

といふことが唯一の我である。我は當爲實在であるといふところに歴史は教育の直接的内容となつて居る。社會の極限は歴史であるが、この歴史の極限は教育であつて、教育に於て吾々の生活運動は最も深刻であり、且つ具體的である。吾々は人格の根柢に於て個性であるために一般にその現實的社會生活に於て所謂 Idealsozialismus なる態度を生ずるが、この理想的社會主義卽ち社會生活の凡ての問題を理想主義哲學によりて解決すべきであるといふことは最も深刻なる意味で教育に待つものである。歴史問題の根柢は教育にある。

第五章　國史及び國民教育

偖、以上余は本書の初め以來歴史及び教育について述べて來たが、省みれば是迄論述したところには暗に國家史を以て吾々人類のもつべき最上の歴史とする豫想がある。併し顧つて考ふればこの國家史は果して何時までも人類の有すべき最上の理想史たるの位置を得るに足るものであらうか。或る歴史哲學者の論ずるやうに、この國家史は人類の歴史的發展の一階段に過ぎぬのであつて、何時かは超國家史としての普遍史の如きものを見るに至るのではないか。この疑問は歴史哲學に於ては吾々に眞面目に起こるところの疑問である。こゝにおいてか余は以上述べ來つた結果更らにこの問題について考へ、歴史と教育との關係を一層具體的に決定するところがなければならぬ。本章に於て凡てこれ等の問題を解決したいと思ふが、以上本書の初めから述べて來たところは經濟及び習俗に注意し、その哲學的意味を發見するに隨つて歴史及び教育を哲學的に攻究したるに止まつて居るから、本章では改めて言語に注意してこれ等の方面から攻究を進めて往かうと思ふ。

一　言語と國民性

先づ言語の自然的性質から考へて往かねばならぬが、この方面から考へるときは、吾々は第一ヴントも考へて居るやうにこれを以て吾々の生理學的官能と見る點から考へて往かねばならぬ。一般に論ずるときは、吾々の生活では刺戟を外部に發表せねばならぬ生理的心理的必然をもつて居る。吾々はこの必然を滿足してはじめて生活作用の均衡を得られるのであるが、この發表の條件は吾々の生活には非常に巧妙なる狀態で備はつて居るから、意識内に或る變化が起こるときはその變化は運動機關の或る適當なる個處を刺戟して自然その意識に適應せる外的運動を起こして來る。吾々の言語は本來この發表として内的生活の忠實なる寫しとして外的音聲となつて現はれたるものである。吾々は或る意識を有する時は自然その意識が發聲機關の適當なる部分を刺戟して特殊の音を發する。恰もオルガンの或る鍵を打つとき之に相當する音を發するが如くである。吾々の言語はこの自然の生理的心理の適當なる條件に基く巧妙なる意識の發表としてその内的狀態の最も忠實なる寫であつて、吾々の生活では僅少の内的變化も直ちに言語の感覺的印象の上に表はれて來る。併し言語といふときは只内的狀態の感覺的寫しの如きものゝみを以て滿足することが出來ぬ。思惟の寫しでなければならぬ。隨つて言語は單純なる表象聯想以上に叡智的原理の働きをもたねばならぬことは勿論、思惟の性質として本來吾々自身の意志その物の發表でなければならぬ。吾々の思惟はその本質に於てはすでに述べた如く意志作用であるが、言語といふときは只この思惟をそのまゝに發表するものであつてはならぬ。發表すべき目的のあるときに發表されるものでなければならぬ。言語は思惟の意志的發表である。これがヴントなどが言語を以て完全なる意志作用であるといつた所以である。

蟲の鳴く音がその内的狀態の變化によつて異なるところあるは人のよく知る處である。高等動物となるときはこの變化を發表する事が非常に巧妙であつて、鳥類に於ては音に巧妙なる情緒の變動による節をつけて歌とする。誰人も春の野に歌つて居る雲雀の歌を聞く時は、其情緒の愉快なる變化を想像せぬものがないであらう。併しこれから進んでその巧妙なる變化の歌を以て話にかへることは思惟をもつ吾々人類に限つた特徴であるといつてよい。猿の如きはその發聲機關が非常に發達して居る上に、よく人眞似をする動物であるから、吾々人類が言語を話すことが出來るならば、彼れ等にもこれが出來ないことがないと想像されぬではない。併し彼れ等は吾々の言語を眞似ることが出來ぬ。曾てルドルフイーは猿の發聲機關の研究によつて猿に言語のないのは

その發聲機關の缺點でない、吾々の言語を發すべき凡ての自然的條件は彼れ等に備はつて居ると斷言したことがあつたが、實際猿の發聲機關と人間のそれとはさう大した差異があるものでない。隨つて吾々は發聲機關の差異についてのみ人類の言語を說明せんとするには事實の承認しがたきものがある。發聲機關が吾々の言語に重要なる關係を有して居ることは事實であつて、或る動物にはこの機關の發達によつて吾々と同じやうに或る特殊の音を發表し得るものがある。例へば犬のrに於ける牝牛及び羊のnに於ける如きこれである。然るに事實に於て彼れ等は只一口も人類の言語を話す事が出來ぬのみでなく、却つて口蓋やその他一般の發聲機關に於てその發達の著しく劣つて居ると考へらるべき鸚鵡が吾々の或る言語を眞似ることが出來るやうな事實もある。かかる事實は言語の發生を只發聲機關の發達にのみ歸するものに警告を與へるものである。

鸚鵡が吾々人類の言語を眞似るについては發聲機關のほかに他の重要なる事實があるらしい。即ち鸚鵡にはこの機關と共に聽覺機關がよく發達して兩機關の聯絡がよく取れて居る事實これである。言語を話すには聽覺機關の發達及びその聯絡によつて聞いたところの音が直ちに發聲機關を刺戟してその聲に相當する適當な聲帶の運動を起こす必要がある。隨つて吾々人間で見ても聾は大抵啞である。發聲機關が自由に發達し自由に使用されても發達せる言語を聞いてその生理的刺戟をこれに移すことの出來ぬ場合には實際言語は發達せぬらしい。この點に於ては言語は全くこの兩機關の反射的生理作用に待つものであるといつてよい。只發聲機關のみからいふときは牛や鳥又は犬や猿は鳥よりもその發達が著しい、殆ど吾々人類の發聲機關の發達と異ならぬから吾々の言語を最も巧妙に眞似ることが出來さうなものである。ところが事實この想像通りに往かぬのは、是れ彼れ等に聽覺機關の發達が鈍い上にまた發聲機關との聯絡が十分でないから發聲に必要なる刺戟の巧妙なる變化が生理的に聲帶や口蓋に起こらぬからであるらしい。兒童が成人の言語を聞いて口を動かすためにその言語の發達を得られることは斷るまでもないところであるが吾々成人でも言語の發達には耳の助けを借りることが最も多い。鸚鵡はこの點に於ては吾々人類と同樣に動物中では特殊の發達を得て居るから發聲機關が發達して居らぬ割合に音聲は發達して居る。

併しこの鸚鵡でも思惟をもたぬために言語をもつことが出來ぬ。吾々の言語は思惟の發表として一々の音聲に特殊の觀念を與へるからこの音聲が特殊の意味をもつと共に他の音聲との區別が明瞭となる、前にも述べたやうに犬や牛は或る音を巧みに發生することが出來るが、音の間に調和的聯絡を保つべき觀念がない。故にその音は動もすれば混亂して所謂犬の遠吠といふやうに凡

ての單音の間に明瞭なる區別ある音律を見るに至らぬ。鳥にもこの發達がないと見えて彼れ等の音聲には大した律がなく、只一音律を反覆するに過ぎぬことが多い。或る諧音を重んずべき音樂上の觀念を缺いで居るから、彼れ等ではスケールもピッチと異ならぬ。この點に於て人類は大なる恩惠的發達を有し、この兩者の區別を明瞭になし得る。隨つて大なるスケールの歌をもつて居る。メロヂーをもつのは人類に限つて居る。吾々はこのメロヂーの中で母音と子音との區別を有するのみではなく。同じ母音系列の中でも教育ある者は無數の母音を發音することが出來る。卽ち音階が無限に發達する。吾々人類では一般に耳によつて發達せる音階の音を明瞭に區別する上に音響の觀念の發達によつてこの自然的區別の音階に明晰なる識別を與へるから音樂の音階が發達する。卽ち吾々人類では發達せる機關によつて自然に起こるところの微妙なる音聲が音階の觀念によつて意識的に刺戟せられ助長せられるから、他の動物では見ることの出來ない音樂の發達を見られる。

兒童の發聲狀態について見るときはこの事實は一層明瞭である。兒童は只吾々の口の運動に注意するために言聲を學び得るのではなく、音聲を聞き別ける聽覺機關を有すると共に、明晰なる識別的判斷を音聲に加へるから、彼れ等に明瞭なる音の意識を生じ、而して彼れ等は此意識を以て自然に聽覺機關から傳れる發聲機關への刺戟を識別的に强くするから彼れ等の音聲に律を生じ發達せる音樂が見られる。勿論彼れ等が實際音樂を發生するまでには大なる練習を積まねばならぬ。口蓋及び口腔の後方の運動は餘程練習を積まぬといふと自由に音聲を發することが出來ぬ。併しそれでも彼れ等には音樂は早くから發達する。兒童の言語は音樂であるが、彼れ等はこれから進んで成人の言語を使用するに至るのは思惟及び意志運動の發表が發達して後のことである。それ〳〵の音聲に明晰なる觀念を與へ、その連續を以て思惟その物となすのみでなく、自己の目的によつてこれを外的に發展するに至つて後のことである。隨つて言語には思惟の發達と發音の練習と兩つながら相伴はねばならぬものがある。

文明人の言語を見るときは吾々はこの事實を最もよく知ることが出來る。吾々は最も發達せる言語が國民間に於て自由に使用せられ、彼れ等の口によつて幾多の改良を施されてゐるのを見る。近世の初めに於ける佛蘭西語の發達を見ればこの事實はよく判る。人類は動物と異なつて言語を發達すべき凡ての條件を備へて居る。第一吾々は生理學的官能の完備せるものをもつて居ると共に音律の觀念が發達して居るから音樂が發達する上に、思惟及び意志作用が發達して居るからこの音樂に內的生活過程の意味を與へ、これを明晰なる思惟を發表せる意志運動とする。こゝ

に吾々の音樂は文章的價値として言語に變化するのである。音聲が律によつて音樂となることは動物にもあるが、音樂と言語とはこの意味に於て全く異なるものである。一は意識の情調を節によつて發表せるものであり、他は更らにこれを思惟の意味によつて社會的文章とせるものである。隨つて思惟の現實的作用をもたぬ兒童は音樂を有するを得るが言語をもたぬ。音樂が言語となるには只その聽覺的印象がよいとか又は發音が容易であつて音階の中に無理の音聲がなく、凡てが調和的音階であるとかいふのみでなく、なほ進んでその音階が文章上の意味をもち、音響が單語として文章構成上に於ける價値をもたねばならぬ。言語の發達から見るときはこの syntactic value が最も重要なる關係をもつて居る。動物の音聲に比して人間に言語の發達するのはロッチエもいつて居るやうに嚴密にいふならばこゝに初まるのであるといつてよい。只音に節を與へて歌とするのみでは諸種のピッチを音樂的に使用するを得るに止まるが、吾々は更らに進んでこの音節に文章上の價値を與へ認識の意味をもたせるから言語となる。勿論言語では音が自然的に一系列をなしてそれ〴〵その音響學上の價値をその連續的系列中に於て有することが必要である。

生理的必要から見て音の自然的系列の調和を破ることが容されぬから發音の際に得手勝手の音を出すことが出來ぬ。インフレキジョンの規則に從つて一定の調和ある音階を踏まねばならぬ。吾々は文典を見るときはこの必要から起これる變化の非常に多いのを發見するであらう。自然の發生のまゝでは吾々の言語は個人の差異によつて可なりその發表を異にする。同じ言語を談じて居る國民ですらも同じ事物に對して必らずしも同一の音響を有せる名詞をもたぬ。音節を異にするは勿論全く綴りを異にせるものをすら見ることがある。現に吾々の國語の中に於ても同一物に對する名詞の綴りを異にすることのあるのは人の知るところであつて、一致するのは凡ての個人に對して同じ印象を生ずるに足るだけの有力なる刺戟を與へる事物のみである。隨つて身體的ならびに精神的に同一傾向を有せる同一民族であつて同一地方に住居せるものが認識において共同的訓練をなせるものゝ外はほとんど見るべからざるところであつて、今日吾々が文明國語としてアクセントに於てもスペルに於ても一致せる言語を有するのは幾多のこの訓練を重ねた結果である。最初は地方語として案外に異なるところが多かつたものであるが、これ等の差異及び變化の中に於ても吾々が認識的に同じ意味をもつから、その間に理解を得るのみでなく、なほこの認識の共同的意味によつてその地方的差異を匡正して共同的言語を作る。吾々人類の言語はつまり認識的意味をもつた音樂である。隨つて會話といふことは吾々の社會的生活には最も愉快なるものの一である。吾々は文明國民の近代語を見るときは如何に彼れ等がその會話を重んじて居るか、

色々の工夫を凝らしてその調和的發達を努めて居るかよくこれを見ることが出來る。音節の輕妙なる抑揚變化が如何に文明社會の社交を愉快にしてゐるか想像するのに餘りある。しかしそれよりもまして文明人の言語を愉快にするものはその明晰なる認識である。彼れ等は進歩せる教育の明晰なる認識によつてその輕妙なる抑揚に富める音節の音樂全體を文章的價値となして居る。吾吾の言語に於てその本質的生命を作るものは認識である。

この事實は名詞を見ればよく判る。通常經驗的常識によるときは、吾々は外界事物を目擊してその印象を得るときにその事物の認識を得るのであると考へて居る。つまり外界に存在せる事物を模寫するのが吾々の認識であると考へて居る。この認識模寫說によるときは吾々は外物の表象を得るときに認識が成立するのであつて、所謂名詞なるものはこの心理的表象を音聲的象徴に發表せるものであるとする。併しこれは誤謬である。認識論上模寫說の成立すべからざるは此處に殊更に論ずるまでもなく明瞭なるところであるから、むろん改めて論ずる必要はない。只名詞の一般的性質を表示するに必要なる範圍内に於てこゝに簡單に一言するに止めねばならぬが、若し名詞がかゝる表象を示すに止まるものとするときは、一體この心理的表象はその表象に限つた經驗的特殊性に止まるものである。隨つて人々の間に一致すべき必然的理由がなければ、又同じ個人に於ても時間の異なるに隨つてその表象を異にし、その間に一致すべき合理的理由がない。隨つてこれを象徴して言語を作つたところがその言語なるものは只偶然性を有するのみであつて、毫も社會的に一致すべき一般性をもつべき理由をもたぬ。たゞ特殊的經驗の偶然性を示すものに止まり、全く言語の資格を缺いで終はねばならぬ。

勿論ヴントなどの考へて居る如く名詞は事物の表象を言語で示したものには違ひないが、これは只心理的に說明したまでに過ぎぬのであつて、この心理的表象がその經驗的特殊性に拘らずこれを言語に表示して一般に社會的言語の名詞なる資格を得るについては、認識論上から見てこの名詞なるものは只心理的表象の象徴ではなく、この表象の成立について論理上の立法者となつて居る一般的概念の象徴でなければならぬ。一口にいふならば特殊の經驗的事物ではなく、認識論上その實體概念を象徴するものでなければならぬ。この點に於て吾々はヴントなどの心理學的說明には大なる不滿を感ずる。ロックが感覺になかつたものであつて叡智中にあるものはないといつたのに對して、ライプニッツが叡智その物は別であるといつたことは認識論上では最も注意すべき銘句となつて居るが、言語上に於ても矢張この叡智その物は然らぬといふことが吾々の最も注意すべきことゝなつて居る。表象の成立には概念の立法的活動がなければならぬやうに、言語

上にもこの立法活動に基く實體概念としてのイデーがなければならぬ。表象はこの立法活動に基くものとして初めて個人的印象以上に認識的價値あるものとして客觀的妥當性を有し、名詞として象徴するに足るべき價値あるものたることを得る。名詞は叡智的立法の概念的世界を表はすものである。吾々の有する名詞は印象の内容を代表するものではなく、この内容を統一する實在を代表するものである。

隨つて名詞が成立するときは必らずがこれと同時に印象の内容を以て屬性となすべき認識論上の要求によつて形容詞が發達する。赤い花といへば認識上では花が實體であつて赤はその屬性である。吾々は赤い屬性をもつて居る花といふ認識上の眞理を赤い花といふ言語を以て示すのである。

形容詞は本來名詞の認識的性質から論理的に發達するものであり、文法上では名詞の屬性を示す語として言語上の位置を有する。動詞もこれと同一の論理的理由の下に發達する。認識論上實在といふときは屬性の統一者である。實在に統一せられた屬性を見るのでなく實在の統一する働きを見るときは品詞の中では形容詞と異なつた動詞を生ずる。花が咲くといふときは蕾の破れることをいふのであるが、この蕾の破れる働きを有するものは花であつて花が蕾から開花の狀態になる變化なり働きなりを稱して吾々は花が咲くといふのである。隨つて花が咲くといふときは、吾々は認識上花としての實在の屬性の變化を承認し、その統一的働きを認めるのである。こゝに動詞を生ずる。隨つて認識上の眞理からいふときは名詞を發生すべき論理は同時に動詞を發生すべき論理である。

以上三品詞について述べたが、言語の一般的性質を攻究するに當つてはこの三品詞以上に他の品詞について一々説明するの必要はないであらう。これ等の三品詞就中名詞と動詞とは吾々がその思想を發表し文章を構成するためにはなければならぬ最小限度の要素であつて、他の品詞は吾吾がその認識の論理に於て分析的に進むに隨つて發生する。名詞から動詞形容詞を生じたる論理は同時にまたこれから副詞や助動詞を生じ各種の品詞を生ずる論理であつて、認識に於ける吾々の論理は言語を作ると共にその言語に品詞の區別を生じ、これに文法的關係の内的結合を與へる。品詞は吾々の認識的論理が分析的に進歩するに隨つて次第に增加するとともに、文法的に結合して文章を構成し豐富なる内容の思想を發表すべき可能性を大ならしめる。吾々は名詞を作るときは認識のイデーを明晰なる反省の對象とする事が出來るから、認識が進歩するに隨つて次第に名詞の數を增加する。近代語に名詞の數が多く、吾々に分詞法や不定法並びにゼランドによりて

動詞をまで名詞に變化することが一般に流行するのは、正に人々の認識が進歩した印であるが、勿論近代語でかく名詞の數が增加せるについては他の品詞の數も增加して居る。近代では發達せる品詞によつて思想の反省を深くすると共に、又其結合によつて吾々の內的生活を精巧なる方法によつて具體的に外的に發表し、思想の認識的發達を益々深くすると同時に、社會的生活に於て人格の個性を纖細なる方法で發表し、人々の道德的結合及びその交際の發達を助けて居ること實に測るべからざるものがある。

偖、以上余は言語の認識的關係について述べたが、單語を生ずる論理は又その單語の文法的關係を生ずる論理であつて、文法上の關係は凡て認識的論理の關係に基いて居る。勿論文法となるときは人々がその言語學的想像によりて諸種の修飾を加へる。隨つて論理に合はぬ個處を生ぜぬではない。例へば性の想像によりて名詞と冠詞との關係の文法的形式が異なる如きはその一例である。かくて認識の論理的形式と言語の文法的形式とは場合によると非常に異なつて來る。隨つて文法に合ふからといつてその言語は必らずしも文章として意味をなすに限らぬ。吾々は自國語を文法に合はして自由に使用するからといつてその言語が論理上思想の意味をなさぬことはよく見るところである。これは文法に對して論理が事實に對するイデーたるの地位を有する以上は、單に文法のみを切り離して考へるときは單純なる音聲の調和を支配する自然的原則として當然あるべきことである。吾々は言語を理解するには文法と論理と及びこの兩者の混成と見らるべき修辭の知識を要するが、就中、論理を要する。

思想の論理的必然的體系からいふときは全く不用の審美的修飾に過ぎざるものも會話の上では修辭として重んぜられることはよく見るところであつて、殊にこのことは初めて言語の文法的修辭を發見したる時代に多い。吾々は六朝の四六體の文章を見てもよくこれを知ることが出來るが、何れの國語に於てもこの文法的遊戯によつてその言語的發表を優美にした時代はあつたが、それだけ後から見れば思想の論理の率直なる主張を害して居ることは免れぬところである。かくて思想の論理を重んずる近代語では次第にこれ等の思想發表としての無益の修飾を取り去る傾向を生じて居る。近代語は次第に論理化する點に於てその特長をもつて居るが、これは認識の論理が進歩し思想が明瞭となるに隨つて生ずる必然的結果であつて、吾々は認識の論理に於て徹底するに隨つて次第に精密なる文法を生じ、これによりて纖細なる區別ある思想の發表を生ずる。エルサレムは主語と客語との關係、名詞形容詞及び動詞などの間に於ける關係は文法的といふよりも寧ろ論理的であるというて居るが、眞にこの語の通りであつて、吾々の有するところの言語はその

本質に於て全く認識の論理である。

勿論言語には認識以外のもの卽ち思想以外のものを含んで居る。會話の動詞的構造が思想の論理と徹頭徹尾一致せねばならぬといふことはない。會話は論理以外に感情的要素を含み、靜肅なる感情は勿論のこと熱情をも含有して居る。吾々は言語によつて自己の內的生活を論理の方法を以て相手に傳へると共に、その相手を感動させねばならぬ。かゝる意味に於ては言語には論理の承認する思想以外のものがあるが、如何にかゝる要素があつても言語にはその本質的要素として必らず認識の論理的立法がなければならぬ。これによつて單語も生ずれば又これを結合して文章となすべき文法も生じ、少數の單語を自由自在に結合して大思想を具體的に發表するを得しむる。シエクスピーアの使用した單語は二萬に上つたといふことであるが、普通吾々の使用して居る單語の數は三四千である。吾々はこれを使つて凡ての思想を自由に發表して居るが、かくの如きことは言語に認識の論理がないならば全く不可能のことである。勿論論理があるために言語は既にも一言したやうに內的必然的に一般に通じ、言語が思想交通の社會的手段となると共に、又その論理的性質によつてこれを使用するものゝ意識を繼次的に明晰に外部に發表し、吾々は言語の力によつて曖昧なる知識を明晰なる形式に發展せしむる。言語は社會生活の交通機關であると共に、又唯一の教育的手段である。言語を使用するために吾々は社會の歴史的思想を得れば又自己の思想を社會に向つて創造的に發表する。

許し言語の認識的論理的性質について考へるときは吾々はなほ進んで攻究せねばならぬものが甚だ多い。以上述べた認識の論理によるときは名詞は實は認識の理念としての概念を代表するものであるが、この概念は全く一般的なるものである。吾々はこの認識の論理を進めるときは既に前々章以來述べて來た所でも明らかなるやうにカントの認識論の先驗主義に達せねばならぬが、この主義に於て達し得るところの至高實在は、經驗的現實の個性についてはラスクもいつて居るやうに何等の說明をも與へるものでない。隨つて以上述べたゞけの範圍でいふならば、言語はまだ具體的生活の經驗に生命あるものといへぬ。認識論上では既に述べたる如く概念は一般的原則の役目をするが、この概念の立法的活動によつて得るところの認識は一般的抽象的イデーである。吾々はこの認識作用に於ては結局カントの物自體又はリツカートの超越的當爲といふやうなものを究竟的實在とするの外ない。價値普遍に達するが、既に述べたる如くこれでは實在に於ても生活に於ても吾々はなほ一個のフイクチオンに止まるの外ない。隨つてこの認識の立場で作らるべき言語を考へる間は、その言語なるものはなほ吾々の生活から見るときは、一個の抽象的フ

イクチオンにしか過ぎぬ。勿論吾々はその認識的生活に於て經驗的特殊を知るのみであつて、其中に含まれて居る一般について何等の反省をもなすことなきものに比較するときは、此一般を得るといふことは慥かに認識の進歩には違ひなく、知識の發達には違ひないが、此一般化といふことは結局價値普遍主義 Wertuniversalismus に達するものであつて、認識上ではなほ一個のフイクチオンに止まるものである。何等の個性をも承認せぬ一般として具體的事實の生活を抽象した一個の形而上學に止るものである。隨つて吾々は假令認識のイデーを代表すべき名詞を得たところが、實はこれに何等の形容さへも加へることが出來ぬ譯である。名詞と共に形容詞が發達すべき論理もなければ文法もない筈であるが、認識の實際に於て名詞の代表する實在はかゝる抽象的一般的のものではなく、具體的價値をもつ所の具體的實在であるから、そこに形容詞も產まるれば又動詞も產まれ、一切の品詞を產むのである。認識に於て具體的一元を考へざるを得ぬが、言語に於てもこの新立場に立たねば吾々はその具體的生命のある理解を得られぬ。吾々はカントの超越的先驗論の立場から現實普遍の具體的先驗論に進まねばならぬが、これには既に述べたる如く先驗論理によつて事實を生む論理を作つて往く自由行爲の立場に立たねばならぬ。この新立場に立つときに既に十分個性について述べたるやうに一々の事物は全體の價値をもつ特殊の存在である。一般に對する一事例ではなく、その要素である。特殊の形式で全體を示すに足るべき活きた存在である。

吾々は一々の事物に自己完了の獨立の個性を承認し、認識の對象を以てそれ自身で獨立の價値をもつ具體的實在たることを承認するを得る。この具體的一元が吾々の認識の本來的立場である。この認識の立場では感覺もそれ自身で獨立の價値を有する實在である。赤き色が輝くといふときは赤き色がそれ自身で完了せる價値を有せる存在として宇宙に實在し、その內的價値を發揮するといふことである。物理學によるときは自然の色はエーテルの波動に歸着するのであるが、この波動があるといふことは吾々に自然が色の感覺を起こさせる機會となるものであり、それ自身で價値を有せる色彩を吾々に感ぜしむる手段となるに過ぎぬ。自然の色彩もそれ自身の價値を發揮せるところの働きである。所謂六塵有聲である。全く自然それ自身が個性であり人格であつて、その音響も活きた音樂であり言語である。認識が純粹なる言語であると共に實在である。

吾々はこゝに言語の形而上學に達するが、認識が本來一樣に妥當するところの知識を求めるにあるのではなく、凡ての對象を何等の生氣もなき鏡に寫すやうに一つの無上實在に統一するにあるのではない。個性の生命の無限の富源に進むにある以上は、吾々の認識の最後の立場に於て價値個性に達し、凡ての存在を以て活きた言語をもつて居るものとすべき立場を承認せねばならぬ。

否、言語をもつといふよりも存在その物が言語であり、言語が無上の實在であるといふ立場を承認せねばならぬ。眞言哲學で一度この眞言を誦ずれば無量の重罪を除くというたのは實在のかゝる立場に立つていへる立言である。この形而上學的立場に於てはその絶對的個性たる點に於て世界の凡ての實在は無上の個性たると同時に吾々自身も無上の個性である。吾々は認識の最後の立場認識が世界建立の行爲たる立場に於ては一般の生命なき立場から轉廻して無限の生命の個性の立場に立ち言語が現實普遍の實在となる。正に絶對の人格である。空海が眞言哲學を考へたのはこの立場であるが、こゝでは自然の實在としての吾々の身體も意識の根柢としての吾々の精神も又吾々の生活作用として直接發表するところの言語も凡て一實在の無限活動である。眞言哲學に於て所謂三密加持を考へることは深き意味のあることであらう。只一般を目的とする認識の論理に於て承認さるべき言語であるときは抽象的なるものである。言語の意味はこの認識によつて生ずるとはいふものゝ、これは感覺的象徴たる音聲が一般的意味の言語の意味を生ずるといふことをいふのみであつて、それ以上の意味はないのみならず、一體この認識批判に於ける言語では結局認識が今もいつた如く生命のない一般性に終る如く言語もまた全く生命のない一般性の象徴に終らねばならぬが、吾々は認識に於てこの一般性をくり拔けてこれを内容とする個性の立場に立ち創造哲學の立場に出るから認識が本來的意味も無限の生命をもつと共に言語も亦無限の生命をもつて來る。直接自己自身で開展するところの叡智的個性として無上の生命をもつてゐる。この立場に於ては吾々の言語は絶對の生命をもつと共にその言語の純粋對象となつて居るところの事物それ自身も亦吾々の言語の通り絶對の生命をもち價値をもつ。言語か生命をもつといふのは本來こゝのことであつて、こゝでは言語はその絶對たる點に於てそれ自身の外最早何等の手段を以ても表明することの出來ない個性である。吾々はこれを論理的言語を以て説明するときはすでにこれを論理的秩序の下にもたらし、その絶對個性をも一個の抽象的形式的價値となし、言語の本質に關して一個の幻覺に陷つて終ふ。言語の本質は言語で説明することの出來ない個性である。言語は認識的論理に生命を有するものには違ひないが、この認識的論理の背後にある我から見るときは言語は論理よりも倫理であり、活きた生活全體である。言語の分析的論理の中には無限の生命を有して居る。吾々の言語では部分こそ全體であり現在こそは永久である。微に入り細を穿つ分析を有するものではその部分的論理の中に何時でも全體を示すことが出來る。只感覺的生活に止まれるものにはかゝることはない。部分は只單純なる部分であるが、この感覺的生活を超越して超感覺的生活の創造を有せるものに付ては現在の部分こそ全體であり、今なる瞬間こそ永久

である。現在の感覺的生活の部分的言語の中に永久がある。人格全體を發展せる個性がある。單一なる品詞も無限の道德的文章である。

言語は論理的分析的であるから説明的となり、吾々は或る言語を發表するときはその分析的言語の論理的必然によつて次ぎの説明的言語を要求し、所謂微に入り細を穿ちつゝ全體を累次的に明晰にする。これが言語の論理的特徴であるが、言語の本來に於ては此分析的部分的説明の中に全體がある。言語は凡ての階段に於て全體であり絶對的個性である。神のみが神を知るといふやうな全體的交通は吾々の社會的交通の言語にはないところである。吾々は部分的發表の中に全體の意味をもつを以て滿足せねばならぬが、この滿足を知るものゝ言語はそれ自身で完了せる意味をもつた個性とし道德的文章として、只一度あつて二度とない歴史である。古から偉大なる人格の言語が永久の生命をもち、歴史の實在となつて居ることを見るが、これは吾々の最も嚴肅なる態度を以つて仰瞻すべき歴史の眞理であらう。

かゝる言語は論理を超越して論理を生ずる倫理として只道德法の中に於てのみ顯現するものである。倫理であるから勿論意志の優越に起源を有するものであるが、單に普通の意味に於ける意志、ヴントが言語の起原として心理的に考へた社會的意志などを距ること遠きものである。名詞を以て表象の代表とする心理語では經驗的社會意志を以て言語の起原と考へられるが、表象の認識的意味を考へるときは吾々は論理的必然的に言語のかゝる心理學的起原をすてゝ哲學的起原を考へ社會的意志には違ひないが、認識的論理の根柢に於て考へらるべき社會的倫理的意志、フィヒテが我を以て世界の根源であると考へ「事行」に於て凡ての實在を道德的と考へたやうな意味で凡ての存在を道德的に創造する社會的意志、所謂目的の王國ともいはれる社會的意志を以て言語の起原と考へねばならぬ。言語はこの起原から考へるときに十分の意味を得、感覺的象徴としての言語も我の具體的發表として無限の生命をもつを得る。ラスクもいつて居るやうにカントの哲學はフィヒテの歴史哲學の個性承認となるが、この歴史哲學に於ては現在の個性が絶對であつて、この個性の中に凡ての歴史がある。過去もこの現在の個性の中にあれば未來も同樣にこの中にある。現在の個性こそは絶對であるといふが、この歴史が現在の個性の中にあるといふことは現在の言語の絶對性の中にあるといふことであつて、言語の中には過去の凡ての文化が最も完全なる姿に於て保存せられて居れば、又將來の文化を産むべき一切の可能をも含んで居る。普通社會學的考へ方によるときは既に述べたる如く吾々は言語を使用するために先祖が永き歴史の發展中に於て得たるところの文化の流れの中には入つて生活することが出來、吾々は歴史的發展の階

段に於て現在意義ある進歩せる生活をなすことが出來るのみでなく、なほ吾々自身の努力によつて得るところの新文化を後世に傳へ、子孫をして一層進歩せる文化的歴史的發達をなさしむることが出來る。歴史ならびにその繼續的發展といふことは言語の力によつて現實的に理解せられるところである。(前著『認識と教育』參考)

併し論じてこゝに到るときは吾々は言語についてなほ進んで最も重要なる問題を攻究せねばならぬものがある。外ではない、國語問題これである。以上余は言語の本質について攻究したが、これは人間として有すべき言語について攻究したのであつて、未だ吾々の現實的に有するところの國語について攻究するところが少しもない。隨つて哲學上では價値普遍論といふことを嫌ふけれども、以上述べたるところではなほ言語の價値普遍論に止まり、言語については全く一個のスイクチオンに止まつて居る。言語の概念論であつて活きた具體的言語にはなほ現實的關係のないものとなつて居る。隨つて吾々はなほこの點について進んで攻究するところがなければならぬが、しばらく理論から轉じて實際上經驗的に與へられたる事實としての言語を見渡すときは言語は民族によつて異なつて居る。吾々人類はみな言語を有するけれども、何等の民族的個性もない人間語といふやうな抽象的言語を有するのではなく、それ〴〵民族によつて內的必然的に異なれる言語卽ち國語なるものを有して居る。この國語は只今日に於て民族や國民によつて異なつて居るのみでなく、彼れ等に初めて言語の聲を發したとき以來異なつて居るのであつて、恐らくこの國語の差異はヴントなどもいつて居る如く民族の有する差異の中では最も根本的なものである。習俗の差異よりも一層根本的なものであらう。國語は初めから民族に固有なるものとして初めて彼れ等の間に言語を發生したときから異なる法則の文法を有して居るのみでなく、この文法は上下數千年間を通じて同一民族間に於ては其の性質に異なるところなく、これによつて同じ國語の範圍內では或る人の話すところの言語は凡ての他人の理解するところとなり、凡ての人々を精神生活の根柢から一生活の個性に結合して居る。民族の自然的音聲として音樂と認識とが特殊の個性としての言語を作り、數千萬年の訓練を重ねて來たものが吾々の現在有する國語であるから、國語の個性はもつとも著しくなつて居る。樹は二葉の時から異なるが、風雨に暴されながら成長するに隨つて次第にその特徴を著しくし明晰なる輪廓の個性を描いて來る。國語もこの通りであつて初めその聲を民族間に發して以來異なれる環境と教育とによつて次第にその個性を著しくし、今日文明國民の國語では最も著しき個性を描くやうになつて居る。最も近き關係のある英佛獨の國語すらも著しく異なり、その國民性を異にするに至つて居ることは普ねく人の知るところである。

隨つて今日吾々の有するところの國語を見て初めからこの通りに異なつて居つたものであると見るときは大なる誤りを生ずるけれども、而もこの差異を生ずべき本質的區別は初めからあつたのであつて、凡ての國語はそれ〴〵その固有の文法によつて變化し發達して居る。この變化は如何に顯著なるものであつても初めから同一の文法によつて起こつて居るといふ點に於て異なるところなく、自然や教育の發達によつて民族の言語は幾多の變化をせざるを得ずして變化した結果今日凡ての民族の話して居る國語となつて居るのであるが、民族の精神生活の個性の本質には變はるところがない。只その輪廓を明晰にするのみである。

偖、然らばこの文法その物は如何なるものであるか。以上述べた言語の性質から考へるときは純粋なる人間語とも稱すべき言語卽ち純粋なる認識若しくは經驗が民族の發聲機關の活動と一致し、純粋經驗から肯定せられるところの論理が民族の自然的發聲たる音聲のフレキジオンそのほかの變化と一致したるものが卽ちその民族の有する言語の文法である。フイヒテの哲學の語を以ていふならば純粋事行は純粋言語であつて、その言語は同時に論理的部分的分析の言語に發達して吾々の經驗的に使用せるところの言語となるべき契機をもつて居るが、この經驗的言語に發達するためにはこの言語の論理の時間的發表が一口にいふならば民族の有する一切の生理的及び心理的條件の發聲的自然と結合し、これと調和せねばならぬ。隨つて民族の言語が固定的に發達するためには幾多の練習と時間とをまたねばならぬ。これによつて言語全體が既にも述べたる如く一種の音樂的自然の論理的意味をもつものとならねばならぬ。吾々は今日文明國民の言語を見るときはよくこの間の事情を知ることが出來る。人類の純粋言語は現實的個性として民族的に特殊の發展をなし、民族の言語の中に特殊の形式を以て精神的生活が感覺的生活となり、その超感覺的生活が特殊の感覺的象徴の中に定立せられ、隨つてそこに特殊の文法を生じ、而してその文法の中に象徴すべき現象生活が象徴すべからざる本源的精神生活と直接相融合してまたこれと分離すること能はぬ統一的個性となつて居る。この個性こそ卽ち國民性格を規定して遺憾なきものである。人は文法といへば只言語の法則を研究するものゝ如くに想像するが、この文法こそ國民が人間としてもつべき本來的生活を日常生活中に具體的に發表せるものであつて、國民の個性を示すになければならぬ最も本來的なる國民論理である。フイヒテの「事行」の哲學を現前に示す唯一の個性である。人間の原始的言語がその簡單なる感覺的發表の中にも既に民族的差異を有することはヴントも承認して居る事實であつて、兒童の言語は民族的に異なつて居る。人種の自然的構造、その生活環象の總合的影響によつて必然的に自然的音聲を異にするから純粋言語の論理は異

なれる形式の文法を作る。つまり民族の言語は自然的音聲の特殊性の中に純粋言語の個性が發表せるものである。否、この言語が文法によつて自然的音樂の言語を作つたものである。言ふまでもなくこの發達にあたつては特殊の練習をつまねばならぬものがあること個人の場合と異なるところなく、兒童の言語發達と同じ徑路を民族が踏んで居る。發生の經路は同一である。

彼れ等は永き年代の生活中に於て次第にその自然的原因による偶然性を取り除き、恰も幼兒の言語が教育ある成人の言語となるに隨つて偶然的原因による得手勝手の變化を除くやうに民族の言語卽ち國語に於てもその偶然性を除き、これを立派なる目的體系の自然的發表とする。吾々は現代の文化國民の言語を見るときはよくこの事實を埋解することが出來る。彼れ等に於てはその國語は最も洗練せられたる内的生活の發表としてその中には何等の不自然なる音響もなくなつて居る。彼れ等の國語はその内的生活の創造であるといふのみでなく、なほこれを一切の必然の中に鍛へ上げ磨き上げたる唯一の現實的價値のある生活であり、個性その物であつて、彼れ等の生活は凡てその國語の中に具體的に發表せられて居る。國民中に國語がその第一聲を發したときから同一の文法の下に發達し、凡ての國民をその規則の力によつて教育して居るが、この教育の力は國語が發達するほど具體的に強くなる。民族に初めて言語を發生したとき以來その文法の特性に變化するところなく、永久に同一民族の言語の發達を支配する法則として民族のために思惟し意欲し、その國民論理によつて彼れ等を精神生活の根柢から現實的に結合してこれを不可分的全體とすると共に、またその創造の根柢に於てこの全體に唯一の創造的個性を與へ、個人をして全體の歴史を發展すべき恒久的要素たらしめて居る。全體の内的統一とその永久發達とは國語の力の範圍内に於てのみ現實的に見られるところである。余はこの點に於てフイヒテが獨逸國民に告げたる演說中に於ける國語及び國民性の見方には最も注意すべきものあると考へ、この演說に於てフイヒテの「事行」の哲學が凡てのフイクチオンを去つて歴史の具體的眞理となると共に、又氏は凡ての空論を去つて現實的具體的に人間の最も貴ぶべき愛國者となつた點に余は哲學上最も深き興味と憧憬とを禁じ能はぬ。

尤もこのフイヒテも初めからこの見解をもつて居つたのではない。既に述べた如くフイヒテがカントの先驗主義を徹底して認識論を考へたのが科學原論であるが、その中の純粋論理の認識に於てカントの超越的先驗主義から進んで個性原理を發見し、價値を個性の創造に求めた。これが既に前章に於ても論じたやうにカント哲學がフイヒテになつて歴史哲學となるに至つた所以である。氏の哲學では個性の非合理的創造といふことが最も重んぜられて居る。フイヒテは初めこの

點から個性價値を重んじ、歴史の究竟を以てこの價値の實現にありと考へたが、晩年獨逸國民に告げたる演說中に於てはこの個性價値の社會相に注目して民族的個性價値を承認し、國民を以てそれ自身目的を合せる個性であるとするに至つたのである。隨つて最初の個性の考へでは國家を以て歴史の究竟に達する手段と考へて居つたが、後に至つてこれを以てそれ自身目的を有せる實在であるといふことを考へるに至り、國民及びその使命を以て唯一と考へ、 die Einzelheit in grossen und ganzen, eine individuelle Aufgabe, die kein anderes Volk haben kann. と斷言するに至つた。

現代の歴史哲學者の中ではリツカート及びラスクを推さねばならぬであらうと思ふが、リツカートはその著『自然科學的概念構成の極限』に於て倫理的命令はその本質によれば凡ての人間に妥當するものであるが、全く一般的な隨つて全く內容のない自然科學的概念の人間にはこの命令の內容ある實現を見られぬ、明晰なる國民性格が有力なる倫理的價値としてこの命令に妥當すると言ひ、歴史的に發展しつゝある國民的特質のために働くものは積極的に文化目的をもち得るものであると論じて居るのも矢張同じ考へであるといつてよい。併し余を以て見るときは氏がこの點について論ずるところは何となく力弱く感ぜられ、到底フィヒテが國民的特性について論ずるところと比較されぬやうに思はれてならぬ。自然科學的概念構成の極限として、歴史を論ずる氏の態度としてはこの點卽ち歴史の國民的現實性を論ずる點に於て非常に力の弱いのを感ぜざるを得ぬが、メーリスの歴史哲學に至つては全くその影の沒した形にあるのを甚だ遺憾とする。

この點に於てはラスクの哲學が一頭地を拔いて居る。氏の『フィヒテの理想主義及び歴史』中に於て論ずるところは確かに現代歴史哲學の白眉とするに足るものと思ふ。元來カントの先驗哲學では人間を以て人間性の下に屬するものとしたが、その哲學は價値の普遍主義のためになほ價値の超越的形而上學に止まらざるを得なかつた。隨つて人間性はカントに於ては具體的なる人間社會をいふのではなく抽象的な人間價値をいふのである。隨つて吾々人間は人間社會の一員といふよりも人間性の代表者であると考へたのがカントであるから、このカントの考へによるときは極端なる個人主義に陷らねばならぬ哲學上の缺點がある。併しこれは所謂超越的先驗主義の哲學による以上は免れがたき缺點であるから、既に論じたる如くフィヒテは更らにその論理を徹底して個性を發見し、個性と社會との關係を國語の創造性の中に解決したのであるが、ラスクの哲學はフィヒテのこの先驗國民論理を更らに精論せる論理の鋭さをもつ。この點に於て氏の『フィヒテの理想主義及び歴史』は今日吾々の有する歴史哲學中に於て最も進步せるものと思ふ。

併し余を以て見るときはこの國民論理を最も高調せるラスクも何故か國語についてはフィヒテの立場に他の論理に於ける場合ほど鋭く立ち入つて往かぬために、個性を論じて國民的個性を考へぬならば、その歴史論は恰もエレア派の實在論の如きものとなるといつて國民的個性に論理を向けて居るに拘らず、この論理に於てその鋭さが抜けて居る感のするのは余の最も遺憾とするところである。思ふにこれは今日の歴史論理派の行き詰る缺點であらう。歴史を論ずる論理を徹底するが歴史の材料をもたず、只論理的に自然科學的考へ方を批判して個性及び歴史の概念を攻究するに止まる場合に自然に生ずるところの缺點である。隨つて自然科學的概念構成の極限として個性及び歴史を考へるリッカートに於てこの點は一層著しく見られるところであつて、リッカートの倫理的國民概念には一向論理の鋭さを見られぬ。何處となく歴史の論理によつて個性を明らかにしたが、歴史に於けるその個性は實はエレア派の實在の考へと太した差異なきことを發見して大急ぎで國民的具體的事實に注意し、その個性を國民倫理に於て考へんとした形跡があるやうに思はれてならぬ。まつたくこの國民倫理と國民論理との關係を攻究してないから、その個性論は國民論に入つたとき浮き調子となり、折角の歴史哲學もなほ最後に於ては形而上學的フイクチオンに止まれることを甚だ遺憾とする。論鋒鋭利で委曲を盡くす氏の歴史哲學も吾々の現在的具體的歴史生活には全く關係なき抽象的歴史論となり眞の意味に於て歴史の本質的事實に具體的に觸れて來ぬ憾がある。併しこれは獨り氏のみでなく、一般に現代の歴史哲學者の缺點である。恐らく今日の歴史哲學者はカントの一般及び特殊から歴史の個性論に入る外に、なほ國民的個性について深く考へる必要があるであらう。否、なほ一歩進んでいふならばこれもなほ廣き意味では歴史の論理であるから、これよりもなほ進んで歴史の新材料に就て研究し、この材料をこの論理によつて考へ直す必要があらう。こゝに初めて歴史哲學は歴史の具體的眞理に觸れて來るのである。余はこゝに至つて初めて歴史哲學は一切のフイクチオンから免れるを得、今日見る如く國家問題、社會問題に關する思想の混亂から免れて吾々は明晰なる理解及び信仰によつて國民の職務を本來正當に遂行し得べき時機が來るものと考へ、勿論教育もこのときに初めて正當なる方法によつて國民の職務として本來的に實行されるものと考へる。

近來國家を以て部分的社會であると見る見解がマシイバーやコールを初めとして多數の國家學者社會學者中に次第に勢力を得て居る、その考へ方によるときは、人類の社會は國家よりも先きに發見せられたものであつて、又、國家よりも空間的に大である。學問とか教會とかいふものは國家の勢力以上に超越するものであつて、その俗權のために支配さるべきものでない。却つてこ

れから解放されるところにその眞價がある。國家を以て全體社會なりと見る見解は何れの點より見るも誤謬であるとする。併しこれは大なる誤謬である。勿論國家よりも社會が人類の歴史上では先きに發見せられた事實には違ひないが、これは社會が國家よりも人類には自然的であるといふ證據にはなるが、それ以上に社會の方が目的々に見て高次のものであるといふことにはならぬ。又社會が國家よりも空間的に大であるといふやうなことも、自然上の事實であつて目的上の價値でないから歴史問題としては省みるに足らぬ論である。學問や信仰は勿論超國家的のものであつて、國家の俗世的權力のために拘束さるべきものでないことは事實である。併しその學問や信仰は一體如何なるものであるか。批判的合理的に考へる限りは勿論論者のいふ如く超國家的のものには違ひないが、この批判的態度で考へらるべき學問や信仰若しくは道德といふ如きものは、既に十分論述したやうに一般的抽象的のものであつて、結局歴史から見れば一個のフイクチオンにしか過ぎぬではないか。

吾々はこの幻覺を超越し超越的先驗論から純粹經驗の具體的哲學に進み、認識が事行であり概念が現實普遍の實在である立場から考へるとき、卽ち目的を最も純粹なる形式に於て自覺した立場から考へるときは國民的個性に凡ての意味に於て歴史の現實性を求めねばならぬのではないか。歴史の背後に於て考へらるべき個性は國民的全體としての個性である。歴史が現實的となるといふことはこの國民的個性に於て考へられることである。目的の明晰なる自覺に於てはヘーグルが歴史哲學の思想の中心に國家概念を置いたやうに國家を至高實在の社會となさねばならぬ。この實在から直接要求さるべき道德命令こそ眞に吾々の生活には具體的現實的命令であつて、この命令の中に要求さるべき政治こそ實際的に歴史を作る政治である。ラスクが歴史は本來政治的秩序として國民の歴史となり、國家生活の活きたる有機體は政治的個性としての國民生活中にその必然的結論を見るといつて居ることが歴史の眞理である。歴史は既に述べたる如く大體政治によつて進んで居るが、これは歴史の本質が國家にある點から直接に生ずるところの最も深刻な眞理である。余はこの點から次ぎに國史問題について少しく考へて見よう。

二、我が國の神話と國史の發達

偖、前節に於て述べたるやうに歴史は本來國史の形式を以て發展すべきものであり、國民に固有の使命を實現すべき形式を以て開展すべきものである。この國史の外に歴史はない。余はこの點から少しく我が國の歴史について考へて見ようと思ふ。

偖、すでに序論に於ても述べたるやうに一般に何れの國の歴史を見ても建國の初めには必らず英邁なる君主があるが、我が國に於ても矢張英邁なる太神がある。神話を見るときはこの太神の人格　如何に偉大なるものであるか、又その御手によつて我が國の歴史が如何に花々しくも亦森嚴莊重に作られたかゞ窺はれる。スサノオの命の英雄的説話とか、オホナムチの神の献國の説話とか若しくは天岩戸の神話とかいふやうな説話によるときは、如何にこの太神が英邁なる建國の君主であつたか、所謂風を望んで四方の民これに歸すとか王化にうるほはぬものがないとかいふやうな光輝燦爛たる大君主であつたかゞ判る。

勿論これ等の神話にも稍後世になつて記紀の編纂されたる頃太神の偉大を示すために附加されたものが多いことゝ思ふが、兎に角その神話を見るときは太神の德は光輝燦爛として四方の事物をして全く顔色なからしめて居る。當時の民族の自然的宗教的信仰は日神の信仰であつたから、自然この偉大なる神話の人格はこの信仰と合して太神は皇祖神であると同時に日神であり、天つ神であると共に現し神であると考へるに至つたものと思はれる。その結果國民の太神に對する信仰は以前とは全く變はり、太神を以て國初に於て幸福なる國民の歴史を作つた神とするのみでなく、永久に國民生活の上に實在する神としてその安寧幸福を産み給ふものであるとするに至つた。即ち國民は太神を以て只國初に於て國民を救ふたのみでなく、現在に於てもこれを救うて居る永久の神であるとするに至つたのである。

宗教上の純粋なる信仰に於ては、或る歴史上の人物を尊信するの餘り遂にその人物を以てその歴史以前から既にこの世界に存在し、また以後に於ても永久に存在して同胞を救濟する英靈であるといふように考へることはよくある。現にキリスト教などに於ても最も進歩せる哲學的意味に於てかく考へ、三味一體論を考へる樣になつて居るが、國民の生活一般に於てもその歴史に於て非常に功績ある國初の英邁なる君主を以て宗教的哲學的に考へ、その人格が神として永久に存在すべきを承認し、これを以て永久に祖國及び國民を守るべき神であるといふやうに尊信するに至ることはよくあることであつて、我が國に於ても歴史のこの神話化によつて日神と皇祖神とを同一化し、これを建國の主であり、國民生活の慶福の主であると同時に地上生活の秩序を超越せる最高神であるといふやうに考へるに至つた。國民によつて、この想像には多少異なるが、大體に於てその間には一致せるところがある。

希臘に於てもヘロドタスの神話に現はれた人間は實に怪力自在なる萬能の神であるが、我が國の歴史に於てもその神話の主となつた太神は國民の生活には偉大なる人間であると共に神であ

る。吾々は記紀その他の古代物語を見るときはよくこれを知ることが出來るが、この太神を純粋なる日神として神話化した結果、その起原を俗世的に求めることは出來ぬから、遂に神話でもこの日神の親は國民の先祖として人間性をもてる神たるイザナギ、イザナミの二神であるとしたのみでなく、日神の建て賜うた日本國土も亦この二神の産み給はつたものであるとした。凡ての國史の初めを神の始源に歸するのであるが、この神話化はつひにこの二神の初めを以て全く純粋なる神、天の御中主の神とするに至つた。即ち我が國民の歴史を以て凡ての意味に於て神から發生したる神聖なる統一史であると解するに至つたのである。併しまたそれだけこの神の歴史として統一的國史を以てこの地上生活に於ける俗世的歴史の初めとするには何等かの工夫を要することは勿論である。これが我が國史の初めに天孫降臨といふ神話を見るに至つた所以であつて、余はこゝにタカマノハラの天の神即ち日神の孫ニヽギノ命が日向のタカチホの峰に降られてトヨアシハラノミヅホの國を治め給ふ神話を産んだものと思ふ。(序論、一、參照)

この神話によつて吾々は太神の建て給うた我が國の歴史をいとゞ神嚴なるものとなし、國初を嚴肅莊重なるものとなすを得た。人はこれを以て神話的想像の架空の事業といふかも知れぬが、これは誤れるも亦甚だしきものである。既にも一言したやうに吾々の個人的生活に於ても少年や青年時代に於ける或る出來事が後年の生活如何によつて非常に重大なる意味をもつて來ることがある。友人と雜談などをして居る際につひ口をすべらして俺は偉いものになつて見せるといふやうなことを云つたのが刺戟となつて一生奮勵努力し、つひに一かどの人物となるやうなことはよくあるところであるが、若し初め冗談にいつたことでも斯うなるといふとその人の一生には最早冗談ではなく最も嚴肅莊重なる事實となり、傳記に特筆大書すべき事件となる。歴史は自然的過程とは全く異なつて居る。後のやり方によつて前のことは如何樣にも變つて來る。個人に於て既にさうであるから、況んや一國の歴史の初めをなすべき大事件が後の國民の發展によりてその意味を發見すること深くなるに隨つてこれを神聖なる神の歴史とするといふことは敢て怪しむに足らぬことである。正に史實のイデーを遡つて歴史的實在としたものである。換言すれば昔歴史を作つたイデーを實在化して神話としたのである。

既に述べたる如く人類がこの地上に現はれたのは五六十萬年も以前のことであつて、爬蟲類が地球上に現はれたのはずつと遡つて八億年も以前のことである。勿論神話による神よりも以前に我が國土があつたに違ひなく、又動物が棲存して居つたに違ひない。人類はこの動物から進化したものであるから、自然進化史的に考へるときは勿論人類としての歴史の初めに於ては世界中何

れの國民も長い年代の間野獸類と殆ど選ぶところなき野蠻の生活をして居つた。地球に於ける人類の發生からいふときは文明の初まつたのは眞に最近四五千年のことであり。殊に今日吾々が受けて居るやうな文明生活の恩惠を見るに至つたのは全く二三百年來の事である。人類がこの地球上に發生せる後長い間といふものは全く野蠻生活を續けて居つた。併しそれでも人類は野獸と異なり、社會進化史的努力によつて先祖の跡を踏むために多少づゝ歴史の發達を促し、漁獵時代から遊牧時代に進んだときは實に人類の社會組織中でも最も大切なる財産の觀念が發達し、社會生活に共同的秩序を見るに至つて居るが、農業の定住生活に到つたときに人類の歴史は長足の進歩をなし、こゝに所謂有史前と有史後との區別を生じたのである。國初に大偉人が出るといふことは大抵この定住時代の初めに見るところであつて、恐らく我が國に於ても太神はこの有史の初めに出でられた大偉人であつたらうと思ふが、その力によつて社會進化史的歴史の理想は顯然として我が國史の上に現はれて來たのである。社會に發達せる習慣法を以て統治の根本原理とするときその社會は國家に發達するが、我が國に於てもこの時太神は祖國の社會生活に於て共同的に人人の生活の幸福を增進し歴史の發達を助けて居つたところの習慣法を以て社會統治の明瞭なる原理となし、こゝに國家を組織せられたのである。社會結合の根柢が道德であることは前に述べた。

この道德が有機的關係を以て土地及び住民の自然に合せる習俗を作り、人々はこれによりて幸福なる共同的生活を營んで居るが、この無意識的作用の習俗を認識して意識的に一層進歩せる形式を以て社會統治の根本原理としたのが太神の建國である。隨つてこの建國によつて我が國民の社會的良心が人格的に國史の中に活動し、具體的にその史實を作るに至つたことは吾々の忘るべからざるところである。吾々は記紀その他の古代物語を見るときは諸種の點に於てこの事實を認めることが出來る。「のりと」を見るときは吾々は如何に純粹なる道德的決心を以て社會的良心が具體的に太神の前に働き出して來たか、又諸種の政治によつて國民生活の上に具體化されて進歩せる史實を作つたか、これを想像するに難くない。かくて一口にいふならば太神の建國によつて我が民族の歴史が明晰なる姿を以て道德的に長足の進歩をなし、組織的政治によつて社會の人々の生活幸福が本源的に增進するに至つたこと測りがたいものがあることは敢て多言をまたぬ、我が國の歴史から見るときはこの時太神の承認した原理によつて國家が成立し國民の生活及びその歴史が始まつたのであるから、我が國史上の眞理からいふときは、この時正しくこの社會的原理即ち民族の歴史的發展の根本原理としての社會的良心がスメラミコトとしての太神によつてパーソナルに我が國民の人格となり國史の根本原理となつた譯であつて、以來國民に事件ある毎にこの

原理が具體的に發達して彼れ等を一國民に結合して我が國史の幸福なる發達を促がし、この建國の精神の流れを汲めるスメラミコトは常に國家の安全と國民の幸福とを念とせられ、國民はまたこれに對して服從と忠誠とを致す幾多の感激すべき史實を作つたのである。

かくて國民の統一は次第に具體的事實として發達せる國史の中に作られて來た。即ち我が國に於ては英邁なる太神がその叡智的洞察によつて大八州の歴史發展の根本精神を認識してこれを國史の中に具體的に明晰にすると共に、以來その精神が國史のイデーとしてスメラミコトを中心に幾多の史實を作り、この史實によつて國民は具體的に歴史及び國家を理解するに至つたのである。我が國の歴史に於ては太神の建國の理想が常に幸福なる國民の歴史を產み、到る處の社會にその幸福なる國民的生活、上下統一の歴史の幸福なる記念を作り、新らたに生まれて來るものをして知らず識らずその恩惠の下に一人前の成長をなさしめて居る。勿論かく歴史の記念が國民の教育となるについては、只斷片的の記念たるに止まらず、これを神話の形によつて歴史の形式に統一し、國史全體の上にそのイデーを明晰にしたるによること最も多きは斷はるまでもないところである。これは既に歴史の認識について述べたるところによつて明瞭なることである。國民の斷片的生活に於て有するところの記念が統一的歴史の史實となるに至つたについては吾々は歴史の認識上古代に於ける神話化力の大なるを認めねばならぬ。古代の史實は神話によつて統一ある歴史となり國民を教育すべき源泉となるが、我が國の歴史に於ても勿論さうであつて吾々は過去の歴史上に於て國民生活の幸福なる記念及びこれを統一せる神話によつて國民を知らず識らずの中に建國の精神に向つて教育し、彼れ等をして何時しか國民の歴史の幸福なる統一的發達の方向に向はしむるを得た。勿論我が國に於てもその長き年代の間に於て國家の歴史の大勢には多少の變化があつたが、歴史のこの根本原理には變はるところなく、凡ての歴史及び政治は最後には常に必らずこのスメラミコトから出た。外形から見る時は我が國の歴史には蘇我氏とか藤原氏平氏とか又は源氏といふやうなものが相繼いで出て、殊に鎌倉以後に於ては幕府といふやうな政權を壟斷した權門が數百年間相繼ぎ、國政は常にその手によつて掌握せられて來たが、而もかゝる場合に於ても國民の意識は最後の場合に於ては必らず天日嗣のスメラミコトに對する忠誠の念を以て占領せられ、國民たるの資格を決定すべき最後の標準は常にこれによつて決定せられたのである。これまでも國家の問題が重大となつて國民に覺悟を要求すること大となればなるほど、その本源的統一の意識が強くなり、國民は言はず語らずこれによつて統一せられ、刺戟督勵せしめられて居るが、記紀の編纂された時代にはこの國民的統一意識は既に非常に強くなつて居つたもの

と思はれる。恐らく天孫降臨を初めとして諸種の神話に於て天日嗣に附隨せるものゝみ多く見えるのは、これ天日嗣に對する統一的從屬を示した事實であると思はれる。國史上でも稍々後世になつても道鏡の如き逆臣が出でゝ皇祚を窺竊するものがあつたことはあつたが、而もかゝる場合に於ても皇祚の永久不滅を守るべき國民は必らずある。史上ではこの時は清麿が出現してこれに天誅を加へたことは人の知る所であるが、この清麿の神託は國民意識の反響したものに外ならぬ。楠公が金剛山に義旗を翻したのも矢張これと同樣の國民意識の活動である。公の金剛山に於ける苦戰奮鬪が目覺しく國民の良心を刺戟するものがあつたから、國民は知らず識らず公の忠誠によつて本源的國民意識を覺醒せられ、終に敵と味方との區別を超越してこの意識の下に凡て本源的國民として結合し運動するに至つた結果、兵數などから論ずるときは到底勝算の見込なき公が大勝利を博するを得るに至つたのである。

我が國の歴史を作るものは太神であり、太神によつて具體的となつた國民の社會的良心である。我が國史上では天皇の御即位の大典の中で最も重要なる儀式として太嘗會の儀式がある。この御儀式では皇祖の御靈としての太神を天皇御躬ら祭らせ給ふのであるが、祭壇には太神が現し世に於てやすらけき神床に鎭まらせ給ふところの御姿を象徴するため、御頭のあたりに檜の扇子樣のものと御足のあたりに御履とを置かせ給ひ、その神床に向つて畏くも天日嗣の天皇が新嘗の祭を營せ給ふのである。皇祖としては神代の初めにこの世界に現はれたが、建國の英靈は永久の神として國民の精神中に活きて歴史を發展し給うて居る。この太神を神代ながらの記憶によつて祭壇に祭り給ひ、天日嗣の高御座に上らせ給ふ新天子躬らその祭壇に登らせ給ひて親祭を行はせられ、國つ民に永へに安らけき歴史を作らせ給ふべきことを誓はせ給ふのであるが、この誓ひの神事の中に永久に國史及び國民の安全を護らせ給ふ太神がこの現し世を治し召し給ふ新天子の御位に降りさせ給ふぞ畏き。この大典こそは謂はゞ天孫降臨の神事をこの世ながらに示させ給ひ、神勅により新天子が太神の御身代として新らしき御代の歴史を初めさせ給ふ最も畏き儀式である。この儀式ほど我が國體の眞髓を示すものは恐らく他にはないであらう。我が國の政治及び政策は大小となく凡てこの御儀式の誓ひから出て來るのである。國家の政治はその歴史的發展の精神を以て根本的方針となさねばならぬことは既に政治の根本原理について論ずる際に述べたが、我が國の政治は凡てこの精神から出て來るから政治は同時に國民の最も大なる教育となるべき理由をもつて居る。併し政治家の中にはこの歴史的發展の精神を明晰なる姿に於て認識してこれを實明なる政策に行ふこと能はず、隨つてその政治が意外にも國事の紛亂を來たすことはないでは

ない。現に楠公の出た建武の政治家の如きこれである。吾々はかゝる事實を考へる毎に慄然として國家の運命が徒らに無智無節操の政治家によつて翻弄せられることを恐れざるを得ぬが、而も國史の運命は一二の沒理義の政治家によつて支配せらるべくもなく、遠からずして正當なる光を發し、天日嗣の御位は直接國民の頭の上に輝いて來る。政治の如何によつて多少の動搖は免れぬが、來る御世ごとに活き〳〵した力で歴史を作つて來る。正に建國の理想が來る世毎に新らしき個性で實現せられるのである。吾々國民の歴史こそはその本質において天日嗣が太神から受けさせ給うた神勅、太神に對して誓はせ給ふ永久平和の繁榮を織り出せるものである。新らしき御代の歴史ごとに太神の御德を新しくするこそ道理なれ。

吾々はかゝることを考へる毎に神話の歴史上に於ける影響の新らしくも又大なるを想像せざるを得ず、全國々民が知らず識らずその影響によつて訓育せられるを考へざるを得ぬ。又これにつけても古代に於ける史實から神話を作りこれを國史の高遠なる根源とした先覺の歴史的努力を想はざるを得ぬ。恐らく歴史の初めに於て吾々に神話が產まれなかつたならば、此の建國の史實もたゞ斷片的史實たるに止まつて國家の統一的起原を示すことも出來なければ、その歴史は大した意味に於て國民の教育者となることが出來なかつたであらう。余はこの點に於て記紀の作者に對して大なる敬意を拂はざるを得ぬ。併し今日學問の進歩せる吾々から見るときは神話は何といつても國民の歴史の原始的發表である。既にも述べたる如く神話は文化の稍進歩したるときの產物であつて、歴史の活きたる記念に對する國民の內的生活の發表と見るべきものには違ひないが、元をいへば原始的文化形式に於ける發表であるから、今日科學の進歩せる時代から見るときは史實の上からも國民教育の上からも吾々の改めて考ふべき問題が多い。神話は元來歴史小說の形で編まれたものであるから、史實からいつても吾々はこれに何等の研究をも加へずしてそのまゝこれを國民生活の根源を示すに足るべき事實であるとすることが出來ぬ。その中には幾多の誤謬錯覺が交はつて居るに違ひなく、少くとも作者の所謂神話的心理に基く史實の評價に對する誤謬あるを免れぬ。恐らく吾々の有する神話、殊にその中でも最も大切であると考へられるところのタカマノハラから日向のタカチホの峰に降られた天孫降臨の神話、我が國の歴史が永久に繁榮し、スメラミコトが國を作り、國を治め國民に永久の繁榮を生ぜしめ給ふといふ神話も、これを歴史上の事實として科學的に攻究するときは、今日傳說に傳はるところには幾多の訂正すべきものがあるであらう。時代に於ても場所に於てもこれあるであらうと思ふが、是れは一般に古代史には今日の科學的眼光を以て見るときは免れがたきところである。勿論吾々は今日かゝる場合には何處

までも科學的に正當なる研究を積み、事實としての國初を明瞭にせねばならぬ。既に述べたる如く神話は國民の生活に對して大なる影響をもつて居る。後世國民をして知らず識らずその構想の型によつて薫陶せしむる。併しそれだけ又國民のこれに對する恩惠が保守的に流れ、神話に於ける傳說を以て歴史上に於ける史實と混同し、國民生活の根源を感情的に漠然たるものたらしめ叡智的反省を誤らしむることがある。これは吾々の最も注意すべきところであつて、吾々はかゝる場合に於ても第一此の神話に對して科學的研究を積み、國初の正確なる事實を明晰にせねばならぬ。しかしまた歴史は單に年代史の如きものではないのであるから、吾々はこれと同時にこの史實としての古代史に哲學的意味を與へ、古代の神話を以て一方に於ては何處までも科學的に研究すると共に、他方に於てはこれを哲學的に意味の深遠なるものとなさねばならぬ。かくてこそ初めて吾々は神話の正當なる理解を得、これを以て一層光輝ある意味に於て新時代の生活に好影響のあるものたらしむるを得るのである。

以上國史の神話について述べたが、一般に神話化せられたる神は實に莊嚴偉大を極めたるものであると共に、その神に關係せる大小諸種の神々も亦莊嚴を極めたるものである。傳說の示すところの神、人間の先祖としての神々の概念は何人も知れるやうに思索的哲學の示すところの概念よりも更に偉大莊嚴なるものである。その燦爛たる光輝は四方の事物をして顏色なからしめて居る。傳說の示すところによればこの神は永久に老衰を知らざるところの同族のものと極樂世界に於てその同胞的生活の平和を無限に味ふを得たものであつて、その平和の生活から清き流の歴史が湧き出でゝ來る。彼れ等では歴史に於ける大波瀾はこの平和を害する罪惡から起こるものとなつて居る。史實として考へるときは斯くの如きことは如何にしても承認しがたきことである。何れかといへば野蠻の中から文明の歴史がその曙光を現はしたものと見ねばならぬが、吾々は此歴史の曙光について考へその史實に對するイデーを承認するときは餘程歴史の考へ方を異にせねばならぬものあるをはつ見し、神話の創作について最も大なる歴史の眞理あるを發見する。余は歴史の專門家でないから我が國の神話の史實については餘り知るところがないが、恐らく太神の建國の初めに當つては非常に大なる困難と及びこれに打ち勝ちたる雄略とがあつたであらう。一口にいふならば遠大なる宏謨があつたであらうと思ふが、それだけ我が國の建國には太神の人格が籠つて居る。藝術家の苦心の作品がその人の全人格であるやうに我が國史には太神の人格が籠り、その理想が國家の理想として個性ある歴史を作つたに違ひなく、國民の幸福の大なる增加、國家の大なる發展は幾多の太神の恩惠的記念を社會に作つたに違ひない。一口にいふならば我が

國の歴史は既に述べた如く太神の人格によつて作られ、太神の人格は常に國民の歴史的發展の理想としてその史實を作つて居る。隨つて年代を經るにつれて太神の恩惠が國民に加はること多く、皇室が益々繁榮するに至つて太神の傳記及び人格は益々神話的となつたのみでなく、なほこの神話に他の說話を附加してその莊嚴を示すにいたつたものと思ふ。記紀に異本のあるといふことは何よりのこの證據である。個人や又は國家の希望によつて國初を神嚴にするため皇祖や天孫の人格を神聖にし、その事業を高遠にせんとして諸種の物語をこれに加へ我が國の神話は益々大なる發達を遂げた。全く國民の歴史を神の歴史の發展體系として終つたのである。この神話のイデーが後の雄大なる歴史を產んだ。或は神話の創設時代を過ぎ、換言すれば記紀の時代を過ぎたるときは國民には最早かゝることはなく、隨つて或る意味では國民は神話を創作しなくなり歴史の起原に關する說話は國民生活に於てその興味を失つたといふものがある。現に津田左右吉氏はその興味ある著『神代史の研究』の終りに於て神仙史の如き支那の讀み物が輸入せられるに及んで我が國の神話は爾來發達して居らぬと斷ぜられて居る。神話文學からいふときはさうかも知らぬが、國史に於ける神話の哲學から見るときはこれは大なる誤謬である。成る程俗謠又は民間の讀物といふ形では我が國の神話は記紀時代以後にはあまり發達して居らぬ。國民は神仙史の方に走つたことは事實であるが、歴史哲學的には我が國の神話は非常に大なる發達をして居るのである。余は津田氏のこの新著を非常に興味深く讀むを得、この方面に於て裨益せられるところ甚だ多かつたが、以上の點に於ては研究の方面も異なる故であるかも知らぬが意見を異にし、遺憾を感ぜざるを得なかつた。兎に角我が國の歴史では同氏もいはれて居るやうに太神は皇祖神であると同時に、日神であり純粹なる至上神であるとする信仰が強く響いて居るが、この日神の思想が佛教哲學と結合して哲學化せられ、大日如來の哲學と結合するに至り、太神を以て大日如來の本地垂跡とするに至つた。中世の天皇はこの思想の隆んなるときは退位の後法皇となられてこの哲學的思想を辿られたことは史上餘りに有名なる事實であるが、元來この神話の哲學化は吾々が哲學的に國家の建設を考へ、神話に於ける建國の物語を哲學的に考へるときは當然發達すべき思想である。太神の人格を哲學化し、これを以て哲學的に歴史創造の神であるといふことを承認するときは、佛教思想によるならば當然大日如來を以てこれに該當し、その第一活動として人格化せるものが太神であるといふやうに考へねばならぬ。

余はこゝで大日如來の本地垂跡といふことについて一言說明して置かう。梵をすて我をすてゝ法を採つた釋迦の哲學上の立場は前小著でも述べたやうに正に批判哲學にあつたから、結局リッ

カートの哲學でいふならば超越的當爲を承認する。後この超越的當爲から內存的當爲を承認するに至り、認識を以て世界建立の行爲であると考へるに至つた。大日如來の言說が世界建立であると考へたのは正にこれであつて、この哲學的思想は佛教全體に渡つて非常に强く響いて居るが、兎に角佛教哲學でこの超越的當爲が內存的當爲となり、當爲實在となるべき眞理を本地垂跡なる語によつて比喩的に示した。佛教では大日如來の垂跡によつて釋迦の人格の永久を承認し、宇宙創造の原理として無窮の初めから無窮の終りに至るまで永久に世界の救濟を說かんとして居るが、我が國の歴史哲學では自然太神を以てこの大日如來の本地垂跡であると解した。かくて我が國ではこの佛教哲學による神話の解釋は佛教渡來後間もなき時からつひこの明治維新まで廣く行はれたが、これによつて神話が哲學化せられ太神が國史の永久的創造主となつたことは否定しがたき事實である。

一般的國民の信仰の上に於てはかくの如き哲學的理論はなかつたことゝ思ふが、佛教々理の研究に於てはこの解釋は廣く採用せられ、獨り天台宗や眞言宗に限らず一般に佛教に於て賞用したところであつた。中世に於ては天子も多くはこれによつて修養せられ得度まで受けられたことは前述した。隨つて國史に影響の多かつたことは勿論であつて、これによつて我が國では建國の理想が佛教哲學の原理によつて磨かれ、其上太神が建國の際に立てられた理想が佛教哲學によつて鍛練せられだる國民的個性の歴史原理となつたのである。尤も史實として見るときは斯くの如き場合に於て多くの場合には佛教家がこれを以て宮中に政治的勢力を布殖せんとする政策に利用し、隨つてそこに佛教の眞理解釋に於ても多少利己的立場を混入してつ居たのみでなく、なほ後世佛教家の解するところの形而上學は所謂自然的形而上學に陷つて居つたから、初めその哲學によりて永久的人格及び世界の創造又は歴史の創作を考へたときのやうに大なる影響を歴史上に及ぼすこと能はず、却つて諸種の宗教的弊害を醸し、後には恰もルーテルの宗教改革以前に於けるキリスト教々會の如き忌むべき弊害を生じて居つたから、明治維新當時泰西の新思想が輸入せられると共に所謂廢佛毀釋の聲の下に破棄して省みられないやうになつた。これは大體から見て後世の僧侶の罪の報であるから如何とも致し方がない。吾々は今日再び遡つて佛教哲學を考へ、これを本來の意義に於ける形而上學に進めねばならぬが、佛教哲學は元來既にも述べたる如く認識を以て道德的歴史的世界建立の行爲となし、概念を以て現實普遍の實在と見る哲學である。隨つてこの哲學では個性を重んずるのみでなく、その論理の徹底に於ては唯一の具體的道德的個性として國民的個性を重んぜねばならぬ立場にある。空海がその弟子に對する遺戒中に於て自ら日本

國沙門空海といつて居ることなどは佛教哲學の體得者として吾々の最も注意すべきことであらねばならぬと思ふ。したがつて吾々の今日日本國民として努むべきところはかゝる高尚なる體驗の國民的個性を今日の進歩せる哲學によつて一層明晰なる哲學の體系に開展し、吾々の先祖が崇高なる道德的宗教心によつて感得せる日本國民の個性を嚴密なる哲學及び科學の論理に發展し、その力によつて我が國土の上に本來的意味の國史を作るにある。我が國の社會組織はこの歴史の開展として意義をもつべきである。

我が國では國家を建てられた太神、否、歴史の眞理からいふならば國家を建てられるについて抱かれて居つた太神の理想が歴史のイデーとして天日嗣のスメラミコトの人格であり、又同時に國家の原理である、國民の個性である。我が國の歴史は本來この原理から作られる個性である。

文字通りに解するときは我が國の神話創造は記紀の編纂されて後間もなくなくなつたが、事實に於ては以來歴史の根本精神の中に益々發展して來て居る。神話の作られたるときは國史のイデーは國家的民族的に大なる發展をなし、後に作るべき歴史の原型を示したが、以來我が國民は神話の哲學化により、この國家の根本精神を益々明晰なる形に發展して居るのであつて。只國内に哲學的努力の衰へたるときに國史に大なる暗影を投じて居るのみである。吾々は當さに沈潛思惟深く哲學の根柢に遡つて國史の永久發展を期すべきである。

三、愛國者と愛國心

偖、余は前節に於て我が國史の中に於ては神話は永久に發展して哲學的にその歴史原理となつて居る事實について述べたが、本節ではこの國史の永久原理に對する國民の態度について述べ、愛國者及び愛國心について論じて見ようと思ふ。前節では太神を中心に國史の精神を論じたから本節では楠公を中心にこれ等の問題を論じて見よう。但公を中心にして論ずるといつても一生の事跡をとるといふやうなことはこの一小節でなし得るところでもなければ、又その必要もないところであるから、只公の事跡中で最も莊重を極めたと考へらるべき湊川の戰死を中心にして少しく前後のことを國史の意味の上から哲學的に考へよう。

私は曾て或る人が公の湊川で戰死せられたのを以て早計でないかといふやうに批評し、もし公がこのときその危急の場合から逃れて後日再擧を圖られたならば、或は首尾よく尊氏を討伐して建武の鴻業を永へに日本歴史中に傳へることが出來たかも知れぬといふやうな說をなすのを聞いたことがある。この論者の誰人であるか、今日は記憶して居らぬが、私はこの議論については餘

程考へ直さねばならぬものがあると思ふ。成るほど吾々は容易に人生の目的を棄てるべきものではなく、何處までも奮闘してその達成を期すべきものである。働くべき餘裕の力が幾分でも殘つて居るならば、吾々はその力の續かん限り奮闘せねばならぬ。徒らに中途で目的を放棄すべきものではない。隨つてこの點から公の戰死を考へるならば、或はこれを以て早計でないかと判斷するものがあるかも知れぬ。併しこれは恐らく當時の事情及び公の祖國に對する眞の忠誠を理解せぬ者の抽象的批評に過ぎぬであらう。恐らく人生に於て永久を發見し、この永久の中に祖國の永久を體驗し得た公から見るときは、その永久を眞に永久ならしめんがために當時の事情は一時的生活を棄てねばならぬことになつたのであらう。人生の悲哀には違ひないが俗世的歴史に於て永久生活を樹立し、地上に於ける俗世的祖國の永久を救濟せんとするときは、時に斯くの如き一大悲劇を生ずることがある。

併し之を悲劇といふのも恐らく吾々の俗眼を以て見るからであつて、公の如き人格に於ては悲劇ではなかつたであらう。祖國の永久に感憤し自己の存在と祖國の實在とを一致せしめ得た公の如き國民的個性に於ては湊川の陣歿が初めて完全に祖國の永久に合致し、この永久と共に自己の永久を樹立し得た本願の歴史であつたであらう。

太平記に誌すところによれば、公が手兵を提げて雲霞とみなぎる賊軍の中へ打ち入り、切り立て〳〵奮戰して僅かに七十三騎になつたとき、在家の一村の中へ走り入つて腹を切らんとして鎧を脱ぎ身を改めたるに、斬疵十一箇所あつたといふ話である。死するときはこの七十三騎が六間の客殿に二行に雙居て念佛十返ばかり同音に唱へて一度に腹を切られたといふことであるが、その時公は座上に居て弟正季に向ひ、「抑最後の一念に依りて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ、正季から〳〵と打ち笑ひて、七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり。いざゝらば同じく生を替へて此本懐を達せんと契りて、兄弟共に差し違ひて同じ枕に臥しにけり。」とある。太平記は南朝のために書かれたものであつて、楠松論は北朝のために書かれたものである。從つてこの兩書の立論及び記事には異なるところは甚だ多いが、楠公のことのみはこの梅松論にもよく書いてある。吾々はこの太平記を讀み『正成兄弟討死の事』を讀み終るとき、公は既に永久の祖國に歸れる神となれらたと共に、その寛仁大度から地上の祖國を永遠に守る護國の鬼となれらた事を思ひ、涙の潸然として感憤の念に堪へ難きものあるを覺える。公の陣歿こそは眞に公をして永久ならしめると共に、又永久に祖國を護る神ともならしめ

たのではないか。國家や國民の永久の歴史は只かゝる行爲によつてのみ作られるのである。歴史を見るときは只與へられたる史實を見るよりも、その史實を作つた理想を見ねばならぬことは既に論じたところであるが、吾々は公の如き性格の歴史を見るときに一層この必要がある。吾々は公が陣歿したから南朝が破れ祖國の歴史が中途で斷絶したといふよりも、寧ろ公が戰死したゝめに永久に南朝が勝利を得、祖國がこの時に一層顯然なる姿を以て國民の前にその永久の姿を現じたものと考へたい。

試みに今少しく公の事跡について考へて見よう。一例として金剛山の籠城について考へて見る。公が赤坂を落ちて金剛山に再擧を圖るに至るまでの苦心だけでも、人生や祖國の永久繁榮の高尚なる目的に感憤興起せるものでなければ到底堪へ忍ぶ能はざるところの犧牲の歴史である。今日吾々がこれを追想するときはその尊き奮鬪の跡が歴然として眼底に現はれ、知らず識らず公の奮鬪に對して潸然として同情の涙を流し、無限の感謝と尊崇との念を起こさゞるを得ぬものがある。上は宸襟を安んじ奉り、下は同胞國民の俗世的疑惑を永久に救濟せんがために、公は尊き犧牲を拂つて奮鬪し、公の身體は僅に河内の一孤城によつたけれども、その精神は全國民の意識の根柢に奥深く潜んで居るところの永久の歴史に觸れて居つたから、その行動は一戰ごとに國民の高尚なる愛國心の活動を喚起し、終には賊軍すらも日本國民として公のなすところに共鳴し敵味方の俗世的區別を超越して祖國の永久、地上に於ける道德法の永久實在を念とする愛國心が欝勃として起り、これによつて人々の心の奥に堅き團結を作つたから、金剛山は如何なる武器を以てするも最早拔くこと能はざるところの金城鐵壁となり、公はこの堅固なる城によつて天下に號令するに至り、天下の大勢は全く一變して、公は國民一同に高く天日の光を仰がしめ、皇祚の永久萬歳の基を定めるを得たのである。

祖國の正義による無限の發展、この地上生活に於ける善の永久の勝利の體驗は、この時深く公の力によりて國民の心裡に刻まれたが、恐らく吾々國民に國民意識の隆盛であつたこと、古來この時に越ゆるものないであらう。元寇の克服に於ても日清日露の戰勝に於ても國民意識は隨分強く發揮されたが、恐らく公が金剛山に據つて愛國心の金城鐵壁を築いたときほどこの意識は強くなかつたであらう。國民が公によつてかゝる愛國心の體驗を得たといふことは、我が國の歴史に於てどれだけ幸福であるか測り知り難いものがある。普通歴史に於ては公の鴻業を以て一個の政治史の中に收めて居るが、併し吾々國民の生活に於てはこれほど嚴肅莊重なる宗教的道德的意味をもつた永久的國民救濟の大事業はない。

勿論湊川に於ける公の戰死は我が國民の永久的運命の正當なる發達に對して一時大なる故障を生ぜぬではなかつた。併し吾々はこれを以て會々公の將才が拔群であつたといふ事を語る所の材料としたい。吾々も公が戰死したゝめに我が日本の國土が尊氏の横領するところとなつて終つたと考へ、我が國に正義の永久の勝利などは何處にあるか、全國土を掩うて高尚なる道德的秩序はその影を沒したでないかと嘆聲をもらしたくならぬではない。併し少しく公の事業及び我が國の歴史の永久的本質を考へて見る時は、かゝる嘆聲は畢竟事件の内面を洞察せぬから發するところの聲に過ぎぬのを知る。吾々はかゝる場合に於ても深く事件の内面的眞理にわけ入つて考へ、公の戰死は一時我が國の歴史發展に頓挫を來たしたといふことが、實は眞の日本歴史の發展には得がたき本質的機會を作つたのであるといふ眞理を悟らねばならぬ。フイヒテは國家及び國民の統一は戰勝敗北、艱難苦痛の歴史によつて得られるといふことを狐逸國民に敎へて居る。眞の國家の統一、國民の永久繁榮は偉大なる事件の中に體驗せられるところの祖國の永久の理想でなければならぬのであつて、我が國に於ける歴史では楠公がその一身を犧牲に供して救濟した國民の永久ほど國民及び國家の記念すべきものはないであらう。艱難辛苦を省みずして祖國のために奮鬪し、遂に湊川で戰死せられたとき、公の最後の尊き血によつて祖國は永久の生命を得、その永久中に於て公も亦永久の生命を得た。公が奮戰苦鬪して尊氏兄弟の軍を惱まし、身に十數の創痍を受けて一族郎黨と共に民家に入つて靜に自刄せられたとき、既に述べた如く弟正季を顧みて最後の覺悟を問はれたるに、正季は莞爾として七度人間に生れかはつて國賊を滅ぼさんと對へたが、公も莞爾としてこの念願を容れ、互に刺し違へて今世を去つたといふことであるが、かりに公の心事を解せざるものが世間普通の事變としてこれを見るならば、戰敗の結果自刄しながら七度人間に生まれかはつて國賊を滅ぼさんといふやうなことは、滑稽な話である。併し人間生活の嚴肅なる事實はこゝにある。釋迦は入滅しながら枕頭に侍れる弟子達に人生の永久を說き、孔子は又既に述べた如く匡人の災に遇うて將に殺されんとしたとき縲絏白刄の下にあつて自己の永久を主張し、匡人それ予をいかんせんやというて俗吏を叱した話があるが、これ等の人々はその一時的生活を超越して永久的生活を持つて居つた。否、この俗世的生活その物が既に永久であり、當爲實在であつたからこれだけのことが出來たのである。

建武中興の功臣は公の外になほ幾人もある。義貞はその門地から官職に於ては公の上にあつた。併しこの義貞にしてもその他の人々としても公父子の如く純眞でない。その傳記には幾多の俗世的事件を伴つて居る。一意只祖國のために奮鬪した誠忠は公父子に於て見るところである

が、恐らく公の如き誠忠の士に於ては事件あるごとに祖國の永久の信念を堅くし、その國民的個性の中には全く祖國の永久を負ふに足るべき信仰と努力とがあつたであらう。ことにその最後の歴史を作つた湊川の戰爭では最も純粹なる姿に於てこの努力信仰をもつて居つたことであらう。

この秋に於ける公は一身これ祖國であつて、その行爲には祖國の歴史の永久を定立するに足るものがあり、臨終の一言はよく永久の史實を作るに足るものがあつたに違ひない。普通の言葉でいふならば、公は一生祖國のために奮戰し、而してその心事が如何にも高尚純白であつたから、その最後の犧牲は深く國民の肺腑を貫き、爾來公の精神は深く吾々國民の心裡に刻まれたから、國民は永久に俗世的國家の疑惑から救はれ、公の人格は以來國民生活の新要素として、歴史の永久發展を指導する力となつたのである。吾々の先祖は公の精神によりて祖國を守り、吾々はまた今日現に公の精神によつて祖國を守つて居るが、吾々の子孫はまた永久に公の精神によつて祖國の神聖を守つて往くであらう。さればたゞ七死七生のみでなく、萬死萬生、永久に公の精神は護國の神となつて居るといへるであらう。偉人はその言行を以て史實とする力をもつて居るが、公の國民意識に於てはその言行は永久の國史上の事實である。七度人間に生まれてこの國賊を亡ほさんといつたことが只公の希望ではなく、國史の嚴肅なる事實である、公の希望通り國史にこの事實を生じ、吾々國民はこの事實の中に於て凡ての國民と結合して永久の歴史を作るを得るものと考へ、吾々の歴史は本來この統一から出る純粹國民意識の「事行」であるべきものと考へる。

私は曾て宮城前の公の銅像を見たことがある。勿論この銅像は鑄造の技術からいふときは議すべき點が多い、大體から見て人物と馬との調和がよくとれて居るとはいへぬ上に、人物の面貌及び胴體に力が入つて居る割合に、足には全く力が拔けて空に浮いて居る。また人物の面貌や鎧兜などに於て古典的嚴肅を象徴せんとして居るに拘らず、馬は全く近代の曲線美である上に、墮落美のフレッシュの感をさへ聯想せしむるものがあつて甚だ面白くない。位置も今少し場所へ出し、二重橋の正面あたりにしたならば如何かと考へたが、鑄造の動機の銘文なども如何にも俗世的である感がした。併しこれ等の缺點も、私には却つて公の如き史上の大人格を現はすべき俗世的技術がないものであるといふ感を與へたのみであつた。この銅像に缺點多きだけ益々公の人格及び事業の偉大を追慕するの念に堪へ難きものあるを覺えた。恐らくこの銅像に於て作者の最も苦心したところは、公の面貌にあつたであらうと思ふ。私は公の面貌が如何なるものであつたかといふことを史實として知るところがないから、この像の面貌が果して實際を示して居るか否かを知らぬが、その發表を見るときは如何にも辛苦艱難を堪へ忍びつゝこの一時的俗世的世界に永

久の祖國を建設せんとする國士の風貌が聯想され正義による祖國の永久の歴史の正當なる運命を双肩に擔へる武將の面影がありゝと窺はれて、公の往時を追懐して感慨の念に堪へなかつた。恐らく吾々が平素忠君とが愛國とかいつて居ることはあまりに淺薄であり安賣りであらう。人は恥を知らねばならぬが、吾々はその祖國に對してあまりに現實的俗世的であつて、森嚴莊重なるべき國事を輕薄に取り扱つて居るではないか。文筆に長じたる空海も眞言の眞理を述べるにあたつては終に筆を投じて、只阿字を見よ罪障消滅せんといつたが、吾々は只祖國を見よ、而してこの祖國の永久から凡ての歴史を作れといふを以て、此の場合に於ける唯一の言葉としたい。

既に述べたる加く我が國の歴史の初めは遼遠であつて、その史實の中に含まるべきイデーに於ては全く認識的言語を超越した純粹事行であり、純粹なる國民的個性である。吾々はこの個性に至つては何等の言語を以ても說明すること能はぬ。全く說明するに言葉のない絶對的創造である。吾々は只これを端的に國史の本源、源泉なき源泉といふの外ないのであるが、この本源を具體的個性に示したるものは、我が國の歴史に於ては太神であり、天皇である。

我が國の憲法に　天皇は神聖にして犯すべからずと宣せられてあるが、我が國史の本質に於ては天皇は全く歴史の神秘の源泉である、而して吾々國民も亦その哲學的意識、人格の絶對的根源に於てはこの天皇と同一人格であり、對絶的にこれに統一せられて居る。スメラミコトも國つ民も歴史の根源に於ては全く統一せられたるところの一絶對である。我が國の歴史はこの統一體から流れ出る意味に於て絶對的統一を有し、而してこの現實的生活に於ては神と吾々のこれに對する信仰との如くスメラミコトの無限の慈悲と吾々國民のこれに對する無限の忠誠とによつて作られて行くべきものである。吾々の生活ではその歴史の永き時代を通じてこの幸福なる統一の國民生活の記念がいたるところに殘されて居る。吾々國民はその生活の多くの場合にこの歴史の記念によつて教育せられるが、歴史に對する自覺が徹底するときにはこの統一が最も立派なる歴史の本源的生活として流れ出る歴史となり、過去の事實をすらも凡て生命ある統一の記念として一層現代に價値あるものとする。曾て吾々の先祖に神話の作られたるときはその歴史的事實に一段の光輝ある統一を與へたが、吾々は今日またこの統一ある國民の歴史を幾層倍か價値あるものとなし、心の底から同胞國民と結合して祖國の永久を祝福すべき歴史を作るべきである。生活の各階段に於てこれを作るべきである。人は須らく理想に活くべきであるが、人格の最上の自覺、何等の意味でも最早歴史のフイクチオンを認めない國民性の自覺、卽ち國史の絶對自覺、全人格の自覺に於ては國民は絶對的に統一せられて一人格となると共に國

史の高尚なる運命に感慣して君に對しては無限の忠誠を捧げると共に同胞に對しては又無限の愛をつくし、假令その名は知られず、その職業は賤しくとも神の名に於て祖國の永久の歴史を作つて行かねばならぬ。日常平和の時に於ては心からその業務にはげむと共に一朝國家の危急存亡の運命に際するときは奮然として起つてこれを救濟すべきものである。而もその救濟には國民の歴史を固有の方法によつて解し、何人にも追隨を許さぬところの個性がなければならぬ。國史の個性と個人の個性とが完全に一致し、以て六尺の孤を託すべしといつたやうによく國家を擔つて起てる氣慨があべきものである。

偖、以上案外に長く公の戰死について國史の永久の上から論じたが、要之、國家の歴史といふやうな森嚴莊重なるべきものは、然う簡單に或る論者によつて想像せられて居るやうに一時的目的から功利的に論斷さるべきものではない。既に歴史の本質ならびに國民性について論じたるやうに、歴史の絶對性を要求する國民的個性の中にその本來的解決を求むべきものであつて、若し外國の例をとつていふならば孔子が春秋を書いて支那の歴史を作らうとしたやうな衷心の希望が當さに歴史を論じ、歴史を作るべきものである。吾々は公の事跡を考へるにあたつても非常に愼重でなければならぬ。自ら永久なること能はざるものには祖國の永久はない筈である。

彼れ等から見れば人は何故に祖國のために奮鬪するのか全く理解すべからざるところである。人間は只利己的に自己の利益を追うて居れば安全であるとするが、自ら永久なるものは然らぬ。彼れ等ではその國民意識に於ては自己と祖國とが同じ永久の一實在であつて、希望が直ちに國民の史實となるべき要求ならびに承認を有して居るから、常識では如何にしても理解すべからざるところの嚴肅なる態度を以て歴史の解決を促すと共に、自己の永久を以て必らず同胞國民の永久を救はんとするの宗教的態度を示して來る。公の歴史はこの點から見て往かねばならぬが、獨逸國民の宗教的改革を見てもこのことはよく判る。ルーテル及び彼れと共に宗教改革に一身を捧げたる人々は既にその信仰に於て永久の福祉をもつて居つた人々である。只自己の信仰からのみいふならば彼れ等は既に永久の救濟を得て居つたのであるが、彼れ等はこの信仰及び救濟に付て同胞國民と永久的に一となり心の底からこれと結合して居つたから、その信仰によつて同胞を救濟せざるを得なかつた。ルーテルは人間の最も尊ぶべき宗教を以て良心の腐敗せる墮落僧侶に委ねること能はず、天國と永久福祉の念とに驅られて蹶然として起ち、宗教改革のために奮然としてその心血を灑いだのであるが、その强き信仰は既に自己の希望を以て最も嚴肅なる史實となすべき力をもつて居る。國民は慷慨悲憤の情を以て彼れ等を助け諸侯は又彼れ等に對してその武裝せ

る抵抗を解いたのである。如何なる俗世的權威も彼れ等の情意の神聖を犯すこと能はなかつた。如何なる俗世的幸福も彼れ等が一度得たところの信仰、永久福祉の天國の信仰をその情意中より奪ふこと能はなかつた。

ひとり彼れ等のみではない。彼れ等の先祖、ローマ人からゲルマン人と稱せられた彼れ等の先祖も亦永久祖國の信仰によつて、偉大なる力を以て南方から强壓して來たローマ人の世界統一に反抗して毅然として鬪つたのである。彼れ等はローマの領地が隣國に榮え、その文明や生活享樂ならびに法律裁判等が整然として備はつて居るのを目擊せなかつたのではない。これ等はみな彼れ等の崇拜讃嘆の的であつた。又ローマ人は彼れ等に對してかゝる文化全體を分與することを欲せなかつたのでもない。實は欣んでこれを與へ、獨逸諸侯の歸服せるものに對してはローマ人は王號元帥號及び諸種の綬章の如きものを與へてこれを歡迎したのであつた。然るに彼れ等は何故に數代間屈せず撓まず常にその力を新らたにして戰ひ、慘憺たる戰爭が再燃また再燃何時熄むべしとも見えざる戰爭を終始一日の如く熱心に繼續したのであるか。只ローマの附傭國になるを欲せなかつたからである。ローマ人は獨逸を附傭國となさんとしたが、獨逸人は何物か殘存せる限りこれに屈せずして戰ひつゝ自國の自由を主張し、死んでも奴隷にはならなかつた。彼れ等に於ては國家の獨立と國民の自由とは獨逸人たるの唯一の資格であつて、これを失ふことは生命のあらん限り堪ふべからざるところであつた。彼れ等は獨逸國民の職務を獨立本源的に獨逸國民固有の精神によつて斷行し、その獨立文化を後世に傳へんためには、凡ての事物を犧牲に供するを辭せなかつた。彼れ等は獨立の獨逸人であつて、その獨立を永久に子孫に傳へて彼れ等を眞の獨逸人に教育せんがためには、如何なる犧牲も辭するところではなく、人間がこの地上生活に於て有するところの最大の犧牲卽ち生命をさへ棄てることをも辭せなかつたのである。只この精神、一片の耿々たる獨立精神、高尙なる祖國愛の精神が獨逸をローマ帝國の大なる魔手から救ひ、その濁立自由を子孫に傳へたのである。

獨り獨逸人のみでない。世界歴史に於て苟も國家の獨立の精神を有せる國民はみなその目的を達して居る。彼れ等は實に國家の永久によつて感慣興起し、つねに他のこれによつて感慣興起することと能はざるものに對して勝利を得たのである。勝利を國民に與へたものは腕力の强大ではない、また武器の精鋭でもない。只永久の心根のみである。苟も自己の拂ふべき犧牲に對して制限を設け、一定の犧牲より以上の犧牲を拂ふことを欲せざるものは、或る點に達するときは必らずその抵抗を放棄するが、自己の拂ふべき犧牲に對して制限を設けず、一切事物、この世界に於て

有すべき至高事物、生命と雖もなほこれを犧牲に供すべきを辭せざるものゝみ、如何なる場合に臨んでもその抵抗を棄てることなく、必ずその目的とするところの獨立自由の勝利を得る。彼れ等に於てのみ希望が史實となるのである。自己の至高代表者、指導者として堅く精神世界の獨立を執つて動かず、これに對する愛によつて感憤興起せる國民が外國民の支配慾の機械となつてその頤使に甘んずる傭兵の如きものに對して勝利を得ることは何等怪しむに足らぬところである。一切を犧牲に供して事に當るだけの勇氣あるものが些細なる利益を的として蠢動せるものに勝つのは全く當然である。戰爭を以て賭博の如きものと考へ、まだこれを初めない中にすでに幾何の儲けがあるかといふやうなことを計算せるものに對しては、單純なる熱狂でさへも能くこれに勝つことが出來る、マホメットの例を見ても判る。尤も余は正史に叙述したるマホメットについては知るところがない。只詩人の歌へるマホメットについて述べるのみであるが、彼れは一朝自己が非常な天賦を有せるものであつて、愚民を指導すべき使命を與へられたるものであるといふことを信ずるに至り、その一生が宗教的熱狂を以て滿たされるに至つたといふことは信じてもよいらしい。勿論彼れの思想には缺陷あり偏狹なるものたるを免れること能はなかつたに違ひない。併し只彼の思想として宗教的熱狂の規定するところとなつたゝめに、その缺陷ある思想も彼れ自身の眼には偉大崇高なる心靈的理想の如くに見え、これに反對するものは皆愚昧なる國民であり安寧の仇敵であるとしか見えなかつた。彼れはかゝる熱狂的信仰によつて自己が神の使命を受けたことを面のあたりに目擊せんがため一切の行動を起こし、彼れの妄想から見て彼れより劣れりと考へるところの者を悉く踏躪し、彼れの神聖なりと考へるところの使命の信仰が全世界から彼れの一身に反映せねば肯かなかつた。彼れはその戰場に臨んだ際に、その使命信仰の心靈的幻像が眼前に現はれて彼れを指導したといふことであるが、吾々はその眞僞を知らぬ。併し彼れの信仰の熱狂の前には敵なかりしことだけは吾々の信じて疑はぬところである。彼れは一切を犧牲に供せざるものに對して一切を犧牲に供すべき態度を以て臨んだのである。彼れの敵は精神に驅られなかつたのに比して、彼れは萬能の自己妄想の精神に驅られ、宗教的熱狂がその國民的態度の中にあり〳〵とその指導的魔力を現じたのである。

彼れ及びその信者もこの信仰によつて永久的秩序の世界をこの地上生活に實現し、永久の幸福を以て子孫を救ひ人類を救はんとしたのであるが、凡て高尚なる精神を有せるものはその國民生活の眼前に於て明晰なる姿を以て目的實現の希望及び努力を起こし、子孫に於て自己の生活を改良せる善良な方法で反覆し、自己の理想とするところの生活が子孫の生活中に於て益高尚なる生

活となり、死して後なほ永く自己の生活が子孫の生活中に存續してこれを救濟せんことを祈願せぬものはない。これが愛國心である。歴史の絶對性はラスクもいつて居るやうに直接政治的秩序として國民の歴史となり、歴史はヘーゲルもいつて居るやうに國家概念を中心として現實的具體的に發展するから、永久の生活は必らず直接には祖國に對する愛國心となつて現はれる。ルーテルが人類を救濟せんとして先づ獨逸國民のために奮鬪した如きことは吾々の最も注意すべきことである。高尚なる精神を有せるものは祖國のために墮落せる悖德漢に對して慄然として恐懼し、正義を把持してこれを失はず、怠惰なるものを見てはこれを鼓舞せざるを得ず、失望せるものを見てはこれを慰撫し奮起せしめざるを得ぬところの精神を自己の肉體から割いて死後これを後昆への無上の遺物として子孫の精神中に傳へ、子孫はまた益これを改善發展して再びその子孫の精神中に傳へ、同胞の心根を高尚にするを祈願せぬことがない。高尚なる精神が子孫救濟のために活躍するのは正に國民生活の本來的要求である。本來的國民生活に於ては凡ての高尚なる精神を有せるものは、みなその思惟又は行動によつつて絶えず同胞の完全に發展すべき種を蒔き、新規にして未だ曾て見ざるところの理想を時勢の潮流中に投じてその力によつて時勢を救ひ、滾々として涸れざる國史の源泉を作るべきことを祈願せぬものはない。この世界に於ける位置及び短き生命に代ふるに永久の生命を以てし、この世界の一時的秩序の中に永久的に繁榮するは彼れ等の一樣に希望するところである。名を貪るは賤しむべき虚榮心に過ぎぬから、個人として徒らにその名を史上に傳ふるを欲するものはないけれども、而も子孫國民の意識中に自己の高尚なる存在を据ゑ國民の永久繁榮と共に繁榮するは彼れ等の齊しく希願するところである。彼れ等は常に國民生活の本質を捕へて思惟し、國史の本源に溯つて行動するから、その生活によつて常にその國に永久の繁榮をもたらし、國史を永久の姿に於て本質的に解決する。

身を以て國民を率ゐる愛國者とは彼れ等のことである。國民中にかゝる高尚なる愛國者が存在して高尚なる思惟行動をなせる結果は、自然その國民の精神生活に行はるゝ法則を擴張して內容の充實せるものとなし、その影響は爾後新國民生活の構成要素となつて彼れ等を內的に指導する。かくて愛國者が出現するごとに國民生活の內容が豐富となり國民は具體的にその本來的生活實現の過程に登るやうになる。かゝる愛國者こそ國民の歴史を作り、彼れ等を永久に救濟するものである。人類の歴史は只人格といふやうな人間價値によつて作られるものではなく、國民的個性によつて作られるものである。歴史が個性の作るところであるといふことは國民的個性の作るところであるといふことは既に精しく述べたが、この個性は高尚なる愛國者に於て初めて現實的

に見らるべきところであつて、國民は彼れ等の事業に於て具體的に歴史の文化問題に參與し積極的にこれに對して努力すべき人格となる。國民は彼れ等によりて具體的に歴史の生活に入り、彼れ等の思惟行動によりてそれ〴〵具體的にその本來的價値及び使命を自覺し實現する。

されば國民とは畢竟同一の精神的社會に於て生活發展し自己獨立に絶えずその社會に行はるゝ法則によつて高尚な生活その物を實現し、本來的歴史を作つて居る團體全體をいふものである。併し何人も國民のかゝる法則その物を明晰なる知識を以て捕へることが出來ぬ。吾々の認識的意識を超越して國民を本來的に結合し發展せしむる神秘的力である。反省された法則、國民意識は眞の國民生活の法則ではなく、個性ではない。これを知識の形式の下に飜譯した第二次的のものである。吾々は普通の意味ではこれに接近するに由ないが、只愛國者のみよくこれに接近してその高尚なる思惟行動はこの吾々の認識では捕捉すべからざる國民性格を明晰なる姿を以て具體的に吾々の眼前にもたらし、吾々をして具體的に本來的國民生活をなさしめる。愛國者の出る毎に國民は次第に明晰なる輪廓の歴史を作り、子孫をして知らず識らずその輪廓の中には入つて國民の本源的生活をなさしめる。前に余は歴史に働いて居る力について述べたる際に、社會の歴史は畢竟フィヒテの哲學の語を以ていふならば「事行」としての創造的個性と此個性に從つて生活する民衆とによつて作られると論じたのも、結局この愛國者と國民の關係をいふものであり、又歴史の本質について論じたる際に、歴史は絶對的個性が無數の絶對的個性を肯定するところに絶對的に解決せられるといつたのも、この愛國者の絶對的創造活動に統一せられたる國民の創造活動をいつたものに外ならぬ。歴史は全く愛國者によつて作られるものである。

一朝國家の獨立が危險に陷り國民がその生命を屠してこれを救濟せねばならぬ危急存亡の秋にあたつてよくこれを救濟し確實なる成算を以つて事業に臨み、磐石をも透すに足るべき決心を以て斷行し、全國民をして知らず識らずその高尚なる目的に向つて趨らしめ、彼れ等をして一切事物、唯一最後の生命に至るまでこれを危險に暴らし犧牲に供して奮鬪せしむべきを命令要求し、これに反對するものを强制し得べき犯すべからざる權威を有せるものは如何なる精神であらうか。かゝる精神は勿論安閑として徒らにその既成生活に甘んずる因循姑息の精神でないことは勿論であるが、高尚なる神的生活を抱いて居るものであつても國民的立場を自覺すること能はず、只抽象的に歴史や道德のフィクチオンを抱けるものではない。只この生活が直接國民生活中に於て現實具體的となり既に述べた言葉でいふならば當爲實在として燃ゆるが如き祖國愛の熱誠となれるものゝみである。國民は愛國者の熱誠によつて初めて現實的に道德や歴史を見るを得、永久

に依るべき精神として欣然としてその犠牲となるを辭せぬ。良將の下に弱卒なしとか孝子の門に忠臣ありとかいふことは昔からよくいふところの眞理であるが、眞の愛國者の下には必らずその犠牲となることを吝まぬ忠良の國民がある。國家が一人を以て起り一人を以て滅ぶといふやうなことは、只その才能が神出鬼没であるばかりではなく、全國民を率ゐて本來的に歴史を作らしむるに足るべき力と熱誠とがあるからである。

四、國史の國際的發達

偖、余は以上國民性及び國史、愛國者について述べ、吾々は現實的具體的には只國民的個性の作る愛國史を有するのみである點を明らかにし、この外に本來吾々の有すべき活きた歴史もなければ生活もない點について論じた。この國史的立場は今日社會に八釜しく唱へられ、又實際政治運動として最も大なる力をもつて居る國際といふことゝ如何なる關係をもつのものであらうか。この問題は吾々の未だ考へないところの問題であるが、歴史の理解には是非明らかにして置かねばならぬ問題である。よつて余は本節に於てこれについて考察しようと思ふ。

生物の生存は種族間の生存競爭となるのが原則でめつて、人類間に於ても自然民族間に於ける競爭は最も激烈である。同じ民族の社會では人種の自然的結合からいつても思想及び一切の精神的傾向からいつても、又その土地の自然的經濟との調和からいつても全く他に見られない調和的存在となつて居る。今日米國の東海岸を見物するときは、初めから定住して居るものと中途若しくは最近に移住せるものとには一目して差異あるを發見することが出來る。和蘭の低地に生活せる住民はその土地の自然と全く調和して、さながら一畫幅中のものとなつて居る。それだけ又彼等がその人種的自然と土地の自然との間に強き自然的國家觀念を養成して居ることは疑ひのないところである。

併しそれだけ又この自然的調和の國民的國家生活は歴史の包括的文化の發達から見て偏狹なる文化の傾向を生じ易く、人々はその生活以外に人類の滿足し得べき高尚なる生活がないものゝやうに想像し易い。吾々は他民族の生活を見ぬときは世界中に自己の屬せる民族の生活以外に進歩せる人類の生活があるか否かを知らぬ。高尚なる道德心を滿足し人間の歴史を作り得るものは只自己の屬せる民族のみであり國民のみであるかの如くに想像して居るが、他民族を見るときは仍且同樣に彼等もその異なれる習俗によつて同樣の滿足なる生活を有して居ることを發見し、人類や國民の高尚なる道德的精神を滿足し得るものは只自己の屬せる國民のみでない。他にも同樣の

國民がある。吾々自身の國民生活外になほ進歩せる國民生活のあるべきを知ることが出來、吾々の國民生活の上に幾多の新教訓を得られる。かくて國民が外國との交際によつて急速なる發達をすることはよく見るところであつて、現に我が國の歴史を見ても判る通り、我が國の發達は常に外國との交際によつて居る。古くは朝鮮や支那との交際は勿論のこと、最近明治維新以後に於ける泰西諸國民との交際が吾々の文明生活に於てどれだけ影響を受けて居るか何人も容易に想像のつくことであらうと思ふ。

一體民族や國民の生活はその自然と最も調和的に發達して居るが、それだけに人類の有すべき文化の一方面をしか代表して居らぬ傾向がある。如何に過去の永き年代を通じて文化の批判的方法によつて包括的に發達した國民の文明といつても、仍且過去の特殊の文化である。隨つて人類の文化を包括的ならしめ國民や歴史の價値をして完全なるものたらしめるためには吾々が批判的方法によつて文化の内容を次第に一般的たらしめるに努力すると共に、廣く他民族他國民と交際し、國際的に國家の歴史を啓蒙して往く必要がある。外國に出でて自國の價値を初めて理解することが出來るとは人々の異口同音にいふところであるが、國際的交際により歴史の價値を一般的に理解すべき機會を作るといふことは吾々には最も必要なるところである。歴史の哲學的批判によりて過去の特殊的文化價値を一般的價値となし歴史の内容をして包括的たらしめると共に、活きた他國民の例を見て具體的に、自らの文化價値を改進せしめる事が必要であるが、學問や宗教は初めからこの國際的一般的目的を以て社會に發達せるものである。政治の如きものは初めから國家的である。隨つて動もすると排外的傾向を見るが、それでも進歩せる政治は次第に國際的に進歩して居る。歐洲諸國の政治はこの點に於て他國に比して長足の進歩を有して居る。隨つて彼れ等の政治は著しく歴史の幸福なる發達を將來すべき力をもつて居るが、學問や道德又は宗教藝術の如きものとなるときは政治と異つてその目的が初めから國際的である。隨つて政治が國家的に熱中せる時代に於ても、これ等のものはこれに國際的刺戟を與へ、學者宗教家又は藝術家は早く國際的に平和の手を延ばして超國家的に活動して居る。ことに宗教の如きものに至つては全く國境のないものであるから、その活動は就中この國際的なる點に於て著しい。信仰の自由は國民の差異を超越して國際的に保障されて居るのみでなく、その態度に於ても凡ての人類に對して一視同仁であるべきことを要求せられて居るから、宗教家は國際的氣分を人類間に發達せしむる點に於て大なる貢獻をなして居る。殊に近世の初めに出た啓蒙的宗教家卽ち汎愛派の人々の如きは全く宗教及び信仰の超國家的人道的たるべきことを標榜して起つて居る。彼れ等のこの方面に

於ける貢獻は莫大なるものである。

尤も現代において宗教家を初めとしてこれ等の人々がかく國際的に活動せるについては極端なる排外的國家思想の勃興せる反動によることが多い。事實をいへば歐洲に於ても先祖が初めて國家を作つたときはまだ自然的に落ち付いて居なかつた。彼れ等が國家を作つた地域は既にも述べたることがあつたやうに人類がこの地上に發生したときの自然的地域ではなく、適者生存の原則に基く食物に對する適應やその他の理由で人類は地球上に於て大移動をなしたから、自然その移動先きの生活に於て不自然が多く、かくて再度の大移動によつて漸く安定に近くを得た。これが中世の初めの人種の大移動であつて、こゝに世界の人類は國民としてそれ〴〵安定的にその土地に永住し得るに至つたのである。その結果彼れ等の生活は以前よりも一層よくその土地の自然と適應するやうになり、勞働の汗と油の記念としてその文化的自然と歴史的に親しみ、自然强き民族的地域團體の國家を作るに至つた。尤もこの自然的國家も中世の宗教的影響の强い時代に於ては超國家的教國の勢力のために壓倒せられてその勢力を伸ばすに至らなかつたが、一度この教國が衰滅したる曉に臨んで、その勢力が政治的力として人類の直接的生活問題の解決に貢獻するところが少なかつたことが明瞭となるに至つて國家の勢力が勃然としてその頭を擡げ、國内の問題を凡てその政治によつて決定せんとしたのはよいか、國際的に迄その專制的利己的勢力を延べて所謂マキアベリズムといふやうな排外的欺僞的外交を事とし、戰爭を日常事とするに至つた。その結果十六七世紀の歐洲諸國は戰亂の街となり、有名なる三十年戰爭に續くに大饑饉と疫病とを以てし、歐洲の天地を全く荒廢に歸せしめた。大學は研究を止め、教會は廢れて集まつて禮拜する者もなき有樣となつた。

歐洲に自由都市の發達したのは斯くの如き國家及び國際の荒廢したるときであつたのであるが斯くの如き荒廢は實に悲しむべきことであるから、人々は國家生活の反省と共に互に國際的に信義を守るやうになると共に、又戰亂の不幸を見るにつけて一度人類の胸中に深く植ゑ付けられた博愛的宗教心がその芽を出し、前に述べた汎愛派の人々が起つて世界の平和のために盡力するに至つた。學者や教育家も亦これと同時に起つて所謂啓蒙的人道的國際の自由平等に基く平和を主張したが、就中、國際的平和に於ては法學者の盡力が最も大であつた。

フーゴー・グロティウスなどがその尤なるものであつて、氏は既に一六二五年平和論を著して法律の力によつて國際的平和を維持すべきを論じ、一六三四年には續いて政治家の手によつて國際聯盟による平和の大計畫を作つたことは人の知るところであるが、サン・ピエール、ルーソー

なども續いてこの國際的平和を主張し且つこれに盡力した。

人道の一如に醒めた學者からいへば人類はその理想に於て平等である。この平等の理想に向つて猛進し、共同的に人道の平和幸福なる生活を實現するところに人間の價値があるのであつて、何も人類として有すべき最高の歴史は或る國民のみの占有に歸すべきものでない。凡ての國民がこれを有し、お互にそれ〴〵その個性の中にこれを解決すべきものである。凡ての國家的國民史は人道の永久的平和なる理想をもつべきものであり、その理想から國家固有の歴史問題を解決すべきものである。それだけ又國家は國際的に協調を保ち平和を重んじ、凡ての國家をしてその高尚なる目的の反省による一切政治の自由を有せしむべきものである。法律的眼を以て外國の隙を窺ひこれに乘じて利己的目的を達すべきものでなく、强國であるからといつて弱國を輕蔑し、その自由を妨ぐべきものではない。これが啓蒙家の教ふるところであるが、カントがこれ等の啓蒙的人道學者の後に出でて彼れ等の論ずるところの事業に道德的哲學的根據を與へ、國家の人格的獨立及び國際間の平和を以て實踐理性の課題としたことは人の知るところである。今日では國民の高尚なる反省に基きその倫理的立場から世界に人道の國際的平和を保つべきであるといふ思想が次第に强くなり、海牙には平和宮殿が巍然として聳えるに至つて居る。

卽ち倫理的國民の實踐的要求が直接國家及び國際の政治的努力を喚起するに至つて居るのであるが、今日では世界各國とも人道の高尚なる反省によりてひろく國際的に歴史の理想を求めてその解決に努め、殊に此理想に對する國際的意志を確立するために政治的行動に出で、國際的に一種の政治的主權を承認して所謂國際聯盟を組織し、廣く人道の理想に基いて世界の平和を將來する主眼を以て國家の歴史問題を解決せんとするまでになつた。從來とも國際聯盟といふやうなものは色々の形式で企てられぬではなく、宗教家の運動などの中には特にこの種の企てが多かつたが、未だ政治的に一種の國際的主權を認めてその歴史の平和的解決を期するといふことはなかつた。この點に於て最近の國際聯盟は長足の進歩をなしたるものと見てよい。吾々はその條項を見るときは如何に世界の各國が政治的に國際的平和の幸福なる人道を主眼とするに至つたか、正にその努力の大なるに驚嘆せざるを得ぬものがある。國民の人格の實踐的道德的命令は全くこの種の立法を要求せざるを得ぬものがある。

尤も今日の國際聯盟をしてかく長足の進歩をなさしめたるについては直接この大戰爭の慘禍反省に原因することが多い。統計の示すところによるときは、この度の大戰爭によつて彼れ等の受けたるところの打擊は實に想像以上に莫大なるものである。獨逸では百六十萬人を戰爭で殺した

といふことであるが、百六十萬といへば勞働することの出來る年齢の男子數の約一割六分である獨逸がこれ程の大損失を戰爭によつて受けたのであるから、凡ての方面に於ける彼れ等の國民生活上の大打擊といふものは實に想像に餘りある。佛國は十八歳乃至五十歳の男子の八割が出征したのであつて、その死傷の莫大なること獨逸に劣らぬ。これだけ考へても此度の戰爭の國民に及ぼしたる損害は實に想像以上であることが判るであらう。戰爭の酣なる頃では聯合軍は一日二十四時間に二億五千萬圓の戰費を投じて居つたのである。この大戰爭の不幸に泣いた國民が以後再びかゝる不幸を見ぬために國際的に平和を尊重し國際的主權の力を以てこれが維持に努めんとせるは理由あることである。戰爭の慘禍が大であつただけ人々の人道的反省も亦深刻であつて、急轉直下の勢で今日の聯盟を產んだのである。

尤も今日の國際聯盟の實際を見るときは、吾々のなほこれに幾多の疑問を抱くべきものがないではない。併しこれは國家の歴史が只國際聯盟を以てのみ進み得べきものではないからであつて吾々は冷靜に過去の歴史を省みて今日の現狀を見るときは、今日は兎も角も國際的に政治上或る主權を設定してその權力の下に世界の平和を維持せんとする迄に至つたことを欣はざるを得ぬ。曾てコスモポリタンなどが宗教的人道的立場から偏狹なる國家的立場に反抗して唱へたところの汎愛主義的世界平和論とは餘程違つて、空想に近いものから現實に進んで來たものといつてよい今日の國際聯盟はこの宗教的平和主義の理想と最近各國間に締結せられた國家間に於ける紛爭の國際的平和主義に基く解決に關する諸種の條約とを材料として故大統領ウヰルソン氏の去る一九一九年のヴエルサイユ平和會議に臨んで編み出したものであつて、從來の國際的平和會議の條約中では最も進歩せるものである。弱小國はこの國際聯盟によつて國際間に尊重せらるべき承認を與へられると共に、强國は武力によつて弱小國に對してその利益を强制的に主張するの權利を拋棄し、國家の行動に國際的制限を與へ不便なる義務を負はしめてまで國際間に人道的平和を主張せんとするに至つたことは慥かに歴史の大なる進歩であるといはねばならぬ。こゝに至つて人類の歴史には世界的理想が現はれたのみでなく、直接その理想が世界の歴史を平和的に解決するため政治的權力となつて働くに至つたものと見ねばならぬ。正に人類の歴史の大なる進歩である。曾て專制國が立憲國となるに及んで國内に於ける幾多の矛盾が除かれたが、又この立憲國が國際的となるに及んでその間に於ける幾多の外交上の矛盾が除かれ、人類の幸福が一層廣き範圍に於て矛盾なく徹底するやうになつたことは眞に人類の慶福といふべきであらう。思ふに今後はこの聯盟の力によつて世界各國の歴史に長足の進歩を來たすことであらう。

或は人あつてこの國際聯盟は或る一二の強國がその國策からこれを利用せんがために作つたものであるといふかも知れぬが、これは餘りに小知惠を廻すものである。勿論國策上から利用出來ない無用の長物であるならば、何人も先んじてこれを編み出す必要はない。編み出す以上は國策上からこれを利用し得るものに違ひないが、而も堂々として世界の平和安寧を目的として全世界の協賛を得つゝこれを編み出し得る點に於て、只利己的に他國の隙きをねらつて考へ出す小策とは全く範疇の違つたものである。同じ國策でも一方は利己的に他人に打ち明けがたい暗き心を藏するものであり、他方は人道的に公々然と凡ての人々と提携しつゝ公明なる目的を達せんとするものである。吾々はかゝる公明正大なる國家の立場に對しては低き立場の政策から揣摩臆測することを止めて、自らも進んでその劃策に參與し努めてその正大なる人道の立場から歴史を稽へて往かねばならぬ。この點に於て吾々はヴエルサイユ條約中聯盟規約の冒頭に掲げられたる「國際協力ヲ促進シ、且ツ各國間ノ平和安寧ヲ完成センガタメ玆ニ國際聯盟規約ヲ協定ス」なる文章を正面から信ずると共に、世界の文明國が進んでこれに參加したることを欣ばざるを得ぬ。

米國の如きはこの聯盟の主唱者創設者であるに拘らず今にこれを批准せぬ形にあつて、人をしてその精神を疑はしむるものあるが、これは前にもいつた如く國家の歴史は國際的にのみ解決されるものではないからであつて、吾々は大體に於て米國のこの聯盟に對する精神を疑ふよりも、ウヰルソンガ正々堂々としてこれをヴエルサイユ會議に提出して各國の協賛を得た態度及びその理想を賞讃し、矢張歴史はこの態度によつてその解決を求むべきものと見ふ。又實際に於て世界各國ともこの聯盟以來國防軍備の縮小に於ても、國際勞働會議に於ても熱心にその審議を重ね、殊に本年は倫敦會議に於てドーズ案、ゼネヴァの國際聯盟總會に於て平和議定書を採用したる如き重要案件が解決せられ、大戰爭後の最も重要なる倍償問題も大體を解決したる如き正に世界平和主義に大なる貢獻をなしたるを欣ばざるを得ぬものがある。國際勞働機關に於ても着々その會議を重ね、以來既に數回の會議を重ねて來たことを以て最も欣喜とせざるを得ぬ。會議の結果同條約冒頭に於て聲明せるところの勞働時間の制限殊に一日又は一週の最長勞働時間の限定、勞働供給の調節、失業の防止、相應の生活を支ふるに足る賃銀の制定、勞務傷害及び疾病に對する勞働者の保護、兒童年少者及び婦人の保護、老年及び廢疾に對する施設、自外國に於て使用せらる勞働者の利益の保護、結社自由の原則の承認、職業及び技術教育等の諸問題が兎も角も今日世界の勞働界及び經濟界の大勢から見て順潮に逐次解決せられるに至つて居ることは人道の爲め最

も欣ぶべきことである。

或はこれ等の勞働問題の解決に於てもまたこれを以て英米國などが自國の勞動者を保護し世界に於ける經濟的位置の優越を維持するために圖れるものに過ぎぬ。表面は人道といふけれども一皮むけば中味は自國本位の我利々々政策に過ぎぬと論ずるものあるを聞かぬではない。併しこれもあまりに公明を缺ぐ想像である。吾々はかゝる想像をなすよりも兎に角今日世界の勞働界及び經濟界の大勢から見てこれを順潮に指導し發達せしむべき方法を以て、國際的に勞働條約を協定し、而してその進歩せる新協定によつて最もよく利益を享受し得べき國家の幸福を羨みこれに向つて進む爲めに努力すべきではないかと思ふ。勿論英米の如き國と我が國などとに於ては國民の經濟狀態を異にし、勞働狀態を異にする。我が國は英米國に比しては既にも述べたる如く非常に遲れて居る。隨つて英米國などに於て最も有利とするところの勞働法が我が國では急激なる改正を目的とする過激の理想法として動もすれば國家の勞働界の現狀を攪亂せしむるの惧れがないではない。隨つて我が國などに於てはこの勞働法に於て或る部分に例外的取扱ひを受くるの止むを得ぬ狀態にある。既に述べた勞働時間の如きこれであるが、而もかゝる場合に於ても吾々は只彼我の國狀を異にするといふ點にのみ注目して全く別途の勞働法を制定することを希望したり若しくば又この勞働會議を迷惑視して成るたけこれに參加することを避けたりすべきものではない。吾々は勞働教育に於ても、勞働者の公定賃銀以外の待遇に於ても又勞働時間内に於ける勞働者の勤務に於ても凡て最善の努力によつて我が國の現在の勞働狀態とこの會議に於ける協定とを調和し、出來るだけ早くこの狀態に近づくべきことを努むべきである。

この努力をなすときに國際勞働會議に於ける精神は吾々の國民生活の中に具體的に活きて來るのである、勿論如何なる國家に於ても國際會議に於ける規約をそのまゝ何等の修飾もなしに國民に適用し得るものはない。必らずこの會議に於ける一般的立法の特殊的適應に於て多少の修飾はなければならぬが、この修飾が多くなり、一般的明文に規定せるところと一致しがたき懸隔を生ずるときは、前にレヒツフイクチオンの場合について述べたるやうに特殊の立法を必要とするに至り、場合によりては國家として國際會議に於ける規約を批准しがたき場合をすら生ずる。しかしこの場合に於ける一般的規約と國家の特殊的事情との觀察は或る當局者の見識によることであるから、當局の如何によつて變動のあるといふことは免れがたきことであり、隨つて吾々は最も愼重公平なる態度によつて事件に當らねばならぬこと勿論であつて、只資本家の立場とか勞働者の立場とかゝらのみ判斷すべきものではない。併しこの問題をこゝでこれ以上に論ずるといふこ

とは岐路に走るものであるから、余はこゝでは只愼重公平なる態度を以て國家の職務を洞察した上でこれを決定すべきであるといふに止めて置かねばならぬが、この態度の決定の中に於て國際會議の一般的理想が具體的に活きて來る。吾々は現實的具體的に國際的一般と國家的特殊との二律背反を解決して歴史の幸福なる發達をなすことが出來る。

歴史の解決はこの二律背反の解決に求めねばならぬのであるが、この點から見るときは近頃吾吾の最も遺憾に感じたる問題は所謂國内法と國際法との權限に關する紛擾である。ことはこの秋ゼネヴァで開かれたる國際聯盟總會に於て作つた平和議定書に關する問題である。同書第六條によるときは、「國際法上當事國々内法の管轄にのみ屬する事項より生ぜる事件にして、聯盟理事會又は國際司法裁判所が全會一致これを認めたる場合、その決定を無視したるものは侵略國とす」とあるに對して、我が國が修正案を提出し「國際司法裁判所に於て國内問題なりと決定したる紛爭についても、理事會に於て適當なる解決方法を決定し、これを勸告案として紛爭兩當事國に提出する義務あるものとし、この勸告を無視したる場合に初めて侵略國と認むべしと主張したが、英國及び英國自治領代表の反對に遭つてこれを撤廻した。國家が進んで國際法を承認し、その平和を議定する以上は、その規約が國家の行動に對する規整力となるべきは勿論であつて、國際間の紛擾問題に關する限り、假令國内法の管轄に屬するものであつても、有力なる平和的方法を以てこれに干渉してこれを平和的に解決すべきものである。國内法の管轄であるからといふので國際的紛擾を生じても國際司法裁判所以上に國際聯盟が平和的にこれを仲裁すべき義務もなく權利もないといふのでは、結局その平和議定規約の効果が徹底せぬことゝなり、この法の不備に乘じて強國が我がまゝをすることになる。これは吾々が最も遺憾とするところである。

一體今日の國際關係では一方では非常に國際的平和に熱心であると共に、他方では國家の利益を利己的に主張するに非常に鋭敏である。これは前にもいつた如く歴史に於ける二律背反であるから別に珍しきことではなく、國家がその獨立に醒めて來た印である。今日の國民及び國家では獨立心が強いから、若し國際間に於ける利害の衝突を見る場合に於ては戰爭に訴へてまでもこれを解決し、自己の利益を主張せねば止まぬ國民的氣慨が年と共に激烈となつて來ると共に、また汎愛的宇宙主義の平和的氣分が次第に濃厚となり、この氣分に基いて世界各國の重なる問題を解決せんとする傾向が次第に著しくなつて居る。全く今日では國民的問題の深刻に主張せられ、互に敵國の際を窺つて自國の利益を擴張せんとする氣分が高調せられ、法律的眼の鋭き光を以て敵國の利益を奪取せんとすることすらある。併し大體から見るときはかゝる鋭き國民的利己心の中

でも次第に問題を國際的に解決し、國民的よりも一層高き人道的立場に基いて解決するに至れることは否定しがたいところである。この度の大戰爭に世界の平和人道の幸福のためといふ態度を取つた英米側が勝利を得たのは、この點から見るときは非常に注意すべき問題である。

勿論歴史がかく一般的人道的に進むについては、人々の歴史認識に於て一般的價値の理想を發見してこれに向つて進まんとする努力が一般に凡ての國民を支配するに至つて居ること斷るまでもないところである。既に述べた如く人類は國家生活を發見したるために産業交通に於ても國防や警察衛生將た又教育に於ても多大の發達をなし、生活の幸福を將來したこと實に測りがたきものがあるが、この國家の立場も人類の道德的反省によるときは只その現實的功利的方法によつて國民の生活幸福を增進するためにのみ凡ての資力を費すべきものではなく、人道の高尚なる實現のためにその本來的努力をなすべきものであり、生活の物質的幸福はこの高尚なる立場の努力の結果として自然に得らるべきものである。隨つて國家は利己的立場に立て籠つて徒らに相爭ふべきものではなく、寧ろ人道の高尚なる實現のために更に平和的に協同すべきものである。かくて歴史の反省は自然一般的價値の世界史に導いて來る。

曾て人類が氏族史地方史から民族史國家史に進んだのも實はこの歴史の反省による價値認識の進歩によるのであるが、この國家史の價値の立場も歴史の論理によるときは更らに高尚なる普遍史的立場を發見するに至る。すでに述べたる如く人類の實現すべき理想は何も或る特殊の國家の有する歴史によつてのみ實現さるべきものに限らぬ。他にもこれを實現すへき形式は幾多ある。或る國家の有する理想は唯一の理想ではなく、その理想が理想とするところの唯一至高の理想は國家以上にある。かくて我が國の建國の歴史に於てもその國家原理に進歩を見たことは既に述べたる如くである。歴史の認識の論理によるときはその理想は全く價値の普遍的體系を作るものとして凡ての特殊的國家を超越する一般である。

かくて歴史の認識に於る理想の指導によるときは、人類の歴史運動は自然超國家的となり、その論理的啓蒙的態度は敵國と考へらるべき國民間に於てすらも平和的交通を容易且つ頻繁にしそのために政治的敵國的境界を緩和して居る。巴里と伯林とは所謂吳越の間柄で相爭うて居るけれども、旅行するものは何時國境を越えたか、人爲的に不自然なる檢閲の外はこれを知らぬ有樣である。社會的交際、生活方法の類似的形式、名譽義務並びに禮式の概念は國民間に於ける感情的差異如何に關せず、次第に諸國民及び異民族間に大なる勢力を以て擴がり、彼れ等を從來知らなかつた新らしき方法によつて結合したことは著しき事實である。その上近代では科學及び藝術が

國際的國境を越えて一般的普遍的方法を以て諸國民を一樣に文化々したが、殊にその最も光榮ある發明發見に對する賞讃的態度に至つては殆ど國家的關係のために拘束せられるところなどはなく、或る場合には却つて他國民間に一層よく歡迎せられる。教會は人類生活の最も大なる普遍的利益を代表して居る。個人的生活事情を超越して神の前に平等に氣高き人道の感情を養成する。故に教會に於ては國民は自然國際的境界を忘れて平等の人道的交際をなすることが出來、教會はその平和の腕を延ばして國家や國民の境遇に顧慮するところなく、世界の一切人類を人道的平和の一社會に結合するために努力する。前に述べた所のグロティウスにしてもルーソーにしても將た又當時幾多の傑出した啓蒙家にしても皆この理想及び努力をもつて居つた。カントも矢張この思想を抱いて居つた學者であつて、その Idee zu einer allgemeinen Geschichte は最もよくこれを語るものといつてよい。この論文は一七八四年の暮近くに發表したものであるが、既に主著たる第一批判書を完成し、又プロレゴメナを發表して哲學體系に對する輪廓を示し、前に述べた價値の普遍主義を略ぼ建て上げたカントとしてはこの論文は全く當然の業であるといはねばならぬ。この論文の趣意は人類に課せられたる最大の問題は完全なる公民社會を作るにあるといふにある。カントはこの公民社會を合法的なる國際聯盟によつて解決さるべきものとした。それ以上に價値の普遍的體系によつて超國家的に一般史的一國家を作るといふ考へはなかつたが、極端なる啓蒙家にはこの考へがあつたのみでなく、既に啓蒙時代を去ること遠き現代に於ても歴史の論理から一般的價値を考へ、人類の歴史が凡てこの價値を理想として進んで居るといふ點から、一般史的文化を高調し、人類の歴史はこの立場の普遍史に進んで往くべきであつて、國家史が世界史に止揚せられるところにその終局の解決を見るのであると想像するものがある。所謂 Weltuniversalismus としての一般史を以て歴史の終局と考へるものであつて、メーリスなどはこれに屬する。併しこれは謬りである。

勿論歴史の論理からいふならばそのイデーとして普遍史に終らねばならぬことは斷るまでもないところである。吾々は如何なる特殊價値を以ても歴史の究竟的目的と考へることは出來ぬ。唯一の普遍的價値を以て究竟的目的と考へねばならぬ。併しこれは歴史の論理に於ける方法論的眞理を示すものに過ぎぬ。この意味に於て所謂一般史といふことは吾々の國家に課せられたる課題と見るべきものであつて、國家はこの課題からいふならば既に述べたるところでも明瞭なる如く何處までも無限に一般的價値に向つて進まねばならぬ。純粹なる神の王國ともいはるべき普遍史を目的として進まねばならぬ。併しそれかといつて凡ての國家はその國家史的立場をすてゝ全々

一如の普遍史に歸着すべきものではない。これは吾々は眞理の研究に於て方法論的眞理を離れて獨斷的にその實在を承認すべからざると同樣に承認すべからざるところである。まさに吾々の注意を要する。

第一歴史の普遍史的考察には既に述べたる如く價値の普遍的體系を作るものとして、眞の歴史の立場からいふときはなほ前途に一暗礁を有して居る。外ではない、歴史の認識的論理に基く幻覺これである。故に吾々はこの價値普遍說から進んで個性について考へ、更らに國民的個性について考へねばならぬ。こゝに初めて凡ての意味に於て歴史のフイクチオンから逃れて現實的具體的に歴史を考へ得べき立場に達するのである。歴史の論理に於ては一般に對する個性が極限になつて居る。凡て歴史はこの極限に於て成立するのであるが、この極限すらもなほ實は歴史一般を考へる極限である。歴史とは何ぞやと問はるゝ認識論上の歴史一般の極限であるから、謂はゞこの個性はエレア派の實在論的考察にしか過ぎぬのであつて、吾々はこれから進んで國民的個性の立場に出でねばならぬ。理想が實在するのが歴史の本質であるが、こゝでは人格は現實的具體的に實在し、リツカートの超越的當爲も內存的當爲となり、凡ての意味に於て理想は現實普遍となつて居る。全くヘーゲルの Konkret-Allgemeine である。

カントは認識の論理に於て理想を發見せんとしてなほこれを發見せず、永久に實在性のない未來に逐ひ遣つた。逐へども逐へども永久に達することの出來ない永久の未來に逐ひやつて仕舞つたが、今やこの永久の未來の理想は現在にもち來され、現在に於て永久の力として吾々を指導する歴史の力となつたのである。又吾々はこの歴史に於て具體的に社會を有し文化を有し得るに至つたのである。

神が道德法の中に現はれてその永久を保障するとか、國家原理が人倫の範圍內に現はれて國民に人格の本源的發展の歴史を作らしめるとかいふことは本來只この國民的個性に於てのみ言ひ得べきところである。我を發見し、國民的個性を發見する「事行」の哲學に於ては歴史は所詮國民的國家史的に解決するあるのみである。ヘーゲルもいつたやうに歴史は國家概念を中心とせねばならぬのであつて、この國家を中心に外では國際聯盟を作つて世界の永久平和を保障すると共に內では立憲政治をとるところに歴史の永久的解決の形式がある。

吾々が自由を有するときに凡ての國民と本源的に一致して國家の凡ての法律に新らしき意味を與へて往くべきことは既に述べたが、これはこの國民的個性のもつ自由に於ていふことであつてこの自由のあるときは吾々國民は凡て一人格として具體的にそれ〴〵その異なれる立場に於て國

家の法律を活かして往けば、又この自由の立場が國家を一人格として國際的にその行動を規正すべき法律を作る道德的個性である。國家はこの個性の自覺が深刻になればなるほど世界と協同し一般的價値の歴史を作るに足るべき立法を得るが、この自覺の理想それ自身に於ては國家は本來人格として凡ての國家と社會的に結合し、價値の世界的目的々平和を作て來る。國家の國際的秩序はこの目的々平和の當爲として吾々の現實的社會に於て有つべきものである。吾々はこの當爲によつて直接平和を重んずる國際的協定を叡智的に編み出し、永久の人道的平和を國際的に保障すると同時に、國際間の凡ての問題をこれに基いて解決すべきである。余はこの國家の當爲の立場の立法から再び飜つて國際問題を考へて往かう。

カントの晩年はナポレオンによつて歐洲の平和が攪亂された時代である。カントは革命の獨逸に波及することを心から嫌ひ、愛國者として色々の政治的意見を發表したが、永遠の平和論もこのときに書かれたものである。思想からいへば批判哲學を完成した七十歳の高齢の論文である。カントは先驗的超越論者として價値の普遍主義をとるに拘らず實踐理性の自由に於てはこの主義を超越して具體的に道德問題を捕へて汝はなさゞるべからざるが故になすことが出來ると命ずるを得たやうに、この永遠の平和論に於てもその自由の愛國的精神から奮然として起稿し、國民は平和を重んぜよ、平和を重んずべき意志を表示して國際間に平和的協約を結べといふ内心の命令が具體的に平和の條項を論ずるに至つたものと思ふ。今その條項とするところのものをあげると一、將來の戰爭に對する材料を祕密に保留してはならぬこと、二、獨立の國家は大小を問はず相續、交換、賣買又は贈與によつて他の國家の所得としてはならぬこと、三、常備軍は時を追うて全廢すべきこと、四、國家の對外的紛爭に關聯して如何なる國債をも起こすべからざること、五、如何なる國家も暴力を以て他の國家の憲法又は政治に干涉すべからざること、六、戰時中は如何なる國家といへども將來の平和に於て相互の信賴を不可能ならしめるやうな敵對運動、例へば暗殺者又は毒殺者の使用、降伏條約の違反、敵國に於ける謀叛の教唆といふが如き行動をとるべからざること、この六條項である。この條項がそれ〳〵高尚なる國家の目的から見て當時及び今日の國家がその平和を永久に保障するに足るべき十分なる條項であるが否かは論ぜぬ。恐らくこれを今日の國際聯盟規約に比較するときは國際間に於ける道德的規約とも見るべきものであつて、これを以て直ちに國際間に於ける永久平和の具體的政治的條項とするには足らぬであらうと思ふが、兎に角國家は永久平和を目的とする點に於て當爲の國際的規約をもたねばならぬ。

凡ての國家はそれ自身の目的自覺によつて社會的に結合し得べき高尚なる立場に於ては、自由

の意志表示として國際的平和の法律的及び政治的條約をもたねばならぬ。國家が目的を自覺すること高尚になればなるほど自己立法によつて嚴密なる條章による條約をもたねばならぬのであるが、この目的の論理的組織ではなく、この認識を超越せる體驗、フィヒテの哲學でいふならば「事行」の立場に於ては啻に國家は國際間に於て既成條約を遵守するのみでなく、各行動ごとにその既成條約に新らしき意味を與へ、各瞬間ごとに國際的新立法をなすべき筈であり、而して又その新立法は直ちに國内的問題を決定すべき新標準となるべき筈である。歴史の認識的論理からいふときは國家は超國家的一般的理想を求めて進歩するが、この論理を超越して個性を發見し、國民的個性に於て最後の意味に於ける現實的具體的理想を發見せる現在の永久的創造に於ては、この超國家的一般的理想をすら現實的に發生する國民の立場があり、國家の實在がある。この實在こそは凡てをその理想通りに創造する當爲實在である。理想が實在するといふことはこの絶對的個性の國家の立場に於て最も具體的眞理としていはるべきことであつて、こゝでは國家の立法は直ちに歴史の事實である。立法する通りに凡ての世界は轉廻する。國家が國際間に命令力をもち、凡ての世界をしてその立法を承認せしむるのはこゝのことである。所謂外交の勝利といふやうなことは本來こゝから來ることでなければならぬ。

人は外交の術及びその背後に於ける國力といふことを神經的に論ずるけれども、歴史の眞理に於ては斯くの如きことは第二である。勿論人もいふ如く國際間に於ては微妙なる感情の變化があつて、これに反するといふことは、多くの場合に於て意外の困難な問題を喚起し、事件の解決を困難に陥らしむることが多い。隨つて國際間に於ては正當なる立場であるからといつて、無遠慮に自己の立場と利益とを主張すべからざるは多言する迄もない。國際間でも個人の交際に於けると同樣にこれを圓滑に主張し、事情の變化に應じて巧みに處理して往かねばならぬ。所謂樽俎折衝といふことは必要なることであらう。又その背後には國力といふことが最も重んぜらるべき外交勝利の要素であるに違ひない。

併しかゝる技術及び國力も歴史の最後に於てはなほこれを重しとするに足らぬ人格の立法的命令を有せることを忘れてはならぬ。孔子が匡人それ予をいかんといつてその語の通りの事實を現前に生じたる底の人格の嚴然たる命令のあることを要する。勿論歴史哲學上のかゝる眞理はその人を得られぬから容易に外交上に於てその例を求めらるべきものではない。吾々は或る偉人の傳記中に於て或る特別の場合に僅かにその一端を捕へ得るのみであるが、をそらくは孔子の夾谷の會に於ける外交の如きはその一例とするに足るものであらう。國家の高尚なる使命に感憤して孔

子が弱魯を助けて强齋を屈したときには慥かにその言行が「事行」として强齋にこれを承認せしむべき嚴然たる命令をもつて居つたに違ひない。

歴史の究竟に於ては既に十分述べたる如く、汝はなさゝるべからざるが故になし能ふところの世界である。こゝでは只歴史の認識の理想ではない。かゝる理想は實は一般的抽象的のものであつて、對象性を有せぬものであるが、この一般を生ずる個性に於ては吾々はこの事件、この國民といふやうに具體的對象をもち得ると共にその對象を全く自己の理想の通りに創造する。國際會議に於ても特殊の相手國をもつと共にその國を凡て自己の理想通りに行動せしむべき立場がある理想が直接事實たる歴史の世界に於ては吾々自身が既に國家として凡ての國家を一世界に結合すると共に、その道德的立法が凡ての國民および國家に妥當的價値を有せる立法として利己的立場の如何に關せず全會一致を以て承認せらるべき價値をもつ筈である。小國を以て大國に勝つとか大會議に於て利害關係の錯雜せるものが集合せるに拘らず全會一致の贊同調印を得るといふやうなことは、何處かにかゝる哲學的根柢がなければ得がたきことである。普通の意味では全體の目的を承認して自らこれに服從し全體と協調しつゝ歴史を作るのであるが、この哲學的立場に至るときは最早かゝることはない。自ら全體の目的を肯定してこれを凡てのものに實行せしむる力をもつ。社會が思ひのまゝ自己の欲する通りになるといふやうなことは、昔から大英雄が或る方面の行動に於て見せたところであるが、これその英雄は少くともその或る方面に於ては社會の絶對的立法者たるに足るものがあつたからである。この絶對的社會性の立法を得るものから見るときは最早普通の意味に於ける外交の勝利といふことはない、最初から完全なる勝利を得て居る。正に自ら社會の絶對的立法者である。只これが普通の歴史に於ける一異例となるに止まり、人類の歴史が時に偉人を見るのみであつて餘り進歩せぬのは、この事業の理想を承認してこれを繼承するだけの人物が後に出でぬからである。遺憾といふのはこのことである。

自然科學的概念構成によるときは小なる數字を以て示さるべきものが大なる數字を以て示さるべきものに勝つといふやうなことは絶對的に承認すべからざることである。五は何處までも三より大であるが、歴史の世界に於ては必らずしも然らぬ、小なる數字を以て示さるべきものが大なる數字を以て示さるべきものに勝つことが往々ある。小數の兵を率ゐて敵の大軍を破るといふやうなことは歴史上には屢々あるところであつて、現に吾々個人の一生に於ても學資金に乏しきものが立派に學問を完成するに拘らず十分なる學資金を有せるものはこれといふ學問をなすこと能はずして一生をぶら〳〵暮らすやうなことはよく見るところである。國際上に於て小國が大國に

命令したり、その我がまゝな主張を抑へつけたりすることはよくあるところであつて、道徳の命令によつて歴史を創造せるところには大國も小國の命令を是れ聽き、その唱導するところに共鳴しゝ事をなさゞるを得ぬ。歴史は論理を超越せる非合理性の創造であることは既に十分述べたが歴史の創造するところ、神欲したまふ故に實在するといふやうに歴史の非合理性によつて創造するところには論理を超越した倫理の敬虔なる態度を以て服從し凡ての世界がこれを中心として現實的に歴史を作つて往く。

國家は國際によつてその理想を啓蒙せねばならぬが、この理想啓蒙といふことは既に述べたる如く結局歴史の認識に基く理想の發見となり、而して又この理想發見といふことは只認識の論理によりて發見せられた一般的理想ではなく、この論理を生ずべき體驗、國民的個性の絶對的創造の立場に於て考へるべきものでなければならぬことになるが、この個性のもつ歴史の絶對性に於てはその立場は國際的規範である。國家は理想をもつ點に於て同時に國際的であるべき筈である國家の獨立と國際といふことは常識を以て考へるときは兩立しがない理想の如くに考へるが、實は兩立せぬのではなく、眞に獨立を知らぬ國家は國際を知らぬ國家である。

國家はその目的を反省するときは國際的に發達せねばならぬものがあるが、その國際的關係の歴史を生ずる立場に於て國家は更らに國際的一般的價値以上の價値を有し、世界史普遍史をすら內容とするところの絶對的個性の立場を有する。この立場は卽ち當爲實在の立場であつて、正に歴史の本源である。吾々はこゝに凡ての歴史を解決すべき源泉を有する。ロッチェはその形而上學の終りに於て實在の根柢を道德に求め、これを以て謬れるものとは考へぬといふことを繰り返して述べて居るが、吾々は歴史哲學の終りに於てこの實在の根柢が道德であるといふことから、歴史は道德の範圍內に於て解決するべきものであるといふことを既に歴史の本質について述べたるやうに堅く信ずると共に、又その歴史は國家の立場に於て國際的平和を永久に解決すべきものであるとを信ずる。この立場を理解せぬ國家は自らも發展すること能はねば、永久の國際的平和にも貢献すること能はざる國家である。國家と國際は矛盾するものではなく、兩者の一致せるところに眞の歴史がある。

五、國民教育の根本問題

以上述べたるところで歴史の問題大體について述べ終つたから、この立場から教育問題を考へて本書の考察を終へよう。

偖、既に本書の初め以來余は人類社會に於ける歴史の發展について考察して漸次その中心的要素に進んで來たが、この考へ方に於ては吾々は歴史に對して第一認識論的批判的方法によつて次第に一般的に價値のある新らしき史實を作つて往くべきことを承認せねばならぬ。余はこのことを法律の立法について述べ　所謂レヒツフィクチオンなるものを承認して置いたが、更らに溯つて考へるときはこの新立法を得るためには個性の立場がなければならぬ筈であり、國民的個性の立場がなければならぬ筈である。この個性の絶對的立場、論理を超越した體驗の自由立法に於て初めて新法律が得られる。余は歴史の考察に於てこの立場に達せぬところの立場にあるものを以て凡て歴史の幻像を畫くものとしてフィクチオンを抱くものといつた。隨つてこのフィクチオンなる語については前後に於て多少異なれる意味で使用して居るところがないではない。併し前述したレヒツフィクチオンなる語は既にその際にもいつてある通り假りにワイフィンガーの言葉に從つてこれを使用したまでゝあつて、この法律の擬制なるものを生じ、吾々が法律の新立法を得るについては生治の具體的イデーとしてこの現實的具體的我の立場を豫想せねばならぬ。吾々の歴史問題の哲學的考察はこの我としての國民的個性に止揚せられるが、この個性の創造から飜つて歴史を觀るときに吾々は初めて本來的意味に於ける歴史を見られる。余はこの點に於て既にも述べたるやうにフィヒテの歴史哲學上に於ける功績を十分に認めねばならぬものと考へる。道德は只人倫の關係に於てのみ見られるといふのがカントの哲學であるが、此人倫は本來國民的個性の中に於て具體的に見られるといふのがフィヒテであつて、この國民的個性が政治的個性として國家の固有の歴史を作らねばならぬといふところに氏の強き哲學的主張がある。フィヒテが獨逸國民に告げたる演說中に於て強く國民の政治的獨立を主張すると共に、獨逸國民は只理想に活きよ、物質的に失つた獨立を精神的に恢復せよと絶叫したことは寔に以ある所といはねばならぬ。

カントによれば道德法は只人倫の關係に於てのみ見られるといふが、その人倫なるものは普遍的價値として人間のもつべき人倫である。隨つて個人的差異には關心せぬが、フィヒテによればこの差異が最も關心せられ、就中、國民的差異が最も關心せられる。この差異の中に永久的價値の人倫を實現し、個人が全體の歴史的要素として道德的政治的獨立をもたねばならぬといふことがその哲學の根本的要求である。余はこの點から吾々國民の政治を見るときに、從來述べて來たところよりも更らに感慨の深きものあるを覺えるが、就中、國民の政治的獨立を現實的に表示すべき普通選擧問題について感慨の最も深きものあるを覺える。今日の國民教育はこの選擧の下に國民に凡て政治的獨立を現實的に承認した社會組織の中に於てのみ具體的に行はるべきものであ

る。

故に余はこの選舉問題について考察したる上で教育問題について考へて見ようと思ふが、實はこの普通選舉問題については既に政治の根本原理について述べたる際に一言し、一般に國民全體が國家の政治に參與するため普通選舉を行ふのが政治の本體であるべきであつて、國民は自由に於て凡て一致結合して本源的に國家の政治を翼贊するを得る點について論じて置いたが、それ以上我が國の普通選舉問題について述べるところかなかつた。しかしこれはこの問題は一般的政治論に於て述べるよりも國民的個性の獨立的政治の要求として述べる方が適切であるから、本節まで延ばして置いたのである。本節では吾々國民の正當なる政治の要求としてこれについて述べて見ようと思ふ。

先づ簡單に普通選舉の歴史から考へて往かう。さて既に述べたる如く今日の歐米諸國では普通選舉といつても男子には既に一般に選舉權を與へられて居るから、女子の選舉權の問題となつて居る。英國などでは既にこの女子選舉權も承認せられて居る有樣である。我が國に於ては經濟及び政治思想の發達が後れて居るから、今日漸く男子に對する普通選舉問題が起こつて居る有樣であるが、經濟界及び政治界の大勢から論ずるときは、今日は勿論進んでこの普通選舉を實施すべき時機に進んで來て居る。國家の運命や國民の歴史發展を來たすに重要なる責任を有せるものは所謂資本家のみではなく、今日は勞働者階級のものが餘程重要なる關係を有するに至つて居るが、この階級のものは國家の政治に關係する直接資格としての選舉權をまだ與へられて居らぬ。事實に於て今日國民の選舉權なるものは既に述べたる如く財産の制限ある歴史をもつて居るから、我が國が過去に於てこの制限選舉を行つて來たといふことは別に怪しむに足らぬが、この財産といふことも結局國庫に對する納稅額によることであるから、國家が消費稅を課し、一般國民から多額の益金を取るに至つたときにこれに選舉權を與ふべきであつた。勿論資本家の納稅額は多く、彼れ等の直接國費を負擔する額は多い。併し見よ今日の國庫は多くは消費稅によつて充たされて居るではないか。酒、食鹽砂糖又は煙草織物といふやうなものゝ消費稅によつて維持されて居ることが多いが、これは一般勞働者の消費によることが最も多いのである。隨つて國庫に對する個人の直接的納稅の有無及び大小によつて選舉權の有無を決定するといふことはあまり理由のないことであつて、依然として資本主義的政治の特權的階級保護をすてぬものといつてよい。隨つて若し公平なる立場の立法から考へるならば、國家が消費稅を課すると同時に資本家とともに一般勞働者及び無産階級にも選舉權を與ふべき法理的必要を生じて居つた筈である。併し實際これを

與へなかつたのは色々の事情もあるであらうが、結局政治の急激なる變化による社會秩序の動搖を避けんとしたものと見ねばならぬ。

實際普通選擧になるときは今日の有權者三百萬人が急激に增加して一千二百萬人以上にもなり隨つて選擧界の狀態は全く一變するものと見ねばならぬから、或る種類の立法上に於ける革新は免れざるところである。隨つてこれを恐れるために普通選擧を時機尙早とするといふことは一應理由の立たぬことではない。併しこれは要するに或る特權階級のものゝいふことであり、彼れ等は從來の政治の下に養ひ得たる特殊的利益を擁護せんとして反對するものに外ならぬのであつて而して今日の如くこの反對が貴族院を中心として起こつて來る以上は、結局普通選擧と共に貴族院それ自身の改良といふことが國民の前に大なる問題となつて來ねばならぬ。一體今日の貴族院制度はその實施後既に三十餘年を經過して居るのであつて、當初適當と認められた制度であつても今日では時勢の變遷と共に諸種の弊害を暴露するに至つて居る。殊に最近貴族院內に大黨派が起こつて衆議院の政黨と結托したり內閣の成立に干涉して種々の言ふべからざる弊害を生ずるに至つてはその改革は最早猶豫すべきではない。今日では全く政黨政治の上に解散なき貴族の階級政治が存在するやうになつて居る。その弊害は國民の等しく認むるところであるから、衆議院から貴族院の改革案を政府で建議した。ところが貴族院では貴族院のことは貴族院自身でやる。衆議院から貴族院の改革を建議せられるといふやうなことは貴族院の最も不快とするところであるといふやうなことをいつて國民の貴族院改革に反對するものがある。併しこれは公平を缺ぐ話である。我が國目下の議院法では衆議院議員選擧法は貴族院の協贊を經ねばならぬことになつて居る。故に設令現在の法律として衆議院が貴族院の改革を議すべき權利を規定せるものはないが、法律の理想として當然衆議院が貴族院の改革案について議し、國民の輿望をその議案中に明晰にすることが必要であり、又この議案を重要なる案として貴族院の改革を實行せねばならぬ必要がある。又貴族院にしても自分が協贊を與へた選擧法によつて選擧せられた衆議院議員が貴族院の改革を議するといふことは間接には自己が自己のことを議する自治であり、その議案によつて改革するといふことは結局自己の意志による自治の改革であるから、さうこれを氣に病んだり反對したりすべき理由はない。寧ろ進んでこれに贊成すべきものである。

余はこのやうな意味で今日の我が國では衆議院議員の普通選擧及び貴族院改良、殊に前者を以て政治の急務であると考へ、既に政府案となつてそれ〴〵此の議會に提出されるに至つて居ることを非常に結構なることゝ考へ、心からこれを欣ぶものである。勿論政治は如何なる場合に於て

も過激に走るべきものではない。政治によつて急激なる革命を引き起こすべきではなく、急激なる革命の起こるべき事情のあるときでも政治の適當なる指導によつてこの革命を緩和し大革命をなさずして自然の中に國民の歴史發展を正當に喚起せねばならぬ。併しそれだけ政治には鋭き眼を以て國民の有する實力を認識しこれに基いて新政策を立てねばならぬものがある。過去を現在に活かし、その現在から未來を作つて往くだけの哲學的意識に於ては過去から未來までを明晰なる管見を以て叡智的に洞察し、國民の正當なる歴史發展のために斷案を下さねばならぬものがあるが、恐らくこの叡智的見解から見るならば政治の範疇としての國民的自由が現代の政治に現はれたるものとして、吾々は第一凡ての國民がその政治に於て自由なれといふ叫び聲の普通選擧を要求し、現代の社會を維持するに最も大なる力をもつて居る勞働者一般にその權利を承認すべきであらう。吾々國民の今日から見るときは現代の我が國に於ては勞働者の實力を承認し、その社會生活上に於ける向上を圖るため先づ政治上選擧權を與へるにある。彼れ等をして憲法に與へられたる公法上の權利を實際政治の上に於て獲得せしめると共に、我が國に於ける國民生活全體を勞働的方面に於て緊張せしめることが最も必要であつて、余はこの政治的獨立の下に前に述べたるところの勞働教育の振興を期すべきものと考へ、この教育の根柢に於て國民の自由創作を養成すべきものと思ふ。

既に述べた如く國家の範疇たる自由は政治的秩序として國民の歴史を作るが、今日の國家の自由は普通選擧による勞働立法及びこの立法の中に於ける勞働創作の自由の形式を以て實行さるべきものである。歐米では早くからこの自由を承認して勞働立法の自由の下に勞働權を社會的に確立すると共に勞働創作を奬勵して居るから、同じ勞働問題でも我が國とは餘程進歩の程度に於て異なつて居る。隨つて經濟及びこれに基く社會組織も異なり、文明先進國の實を擧げて居ることは余も從來屢々述べたるところの如くである。

彼れ等はこの選擧權の方面に於ても今日では既に勞働者の自由選擧から進んで婦人の選擧權をも承認するに至つて居る。尤もこれには婦人自身の政治的自覺に基く運動が與つて大なる力をもつて居ることは勿論であるが、余は一般に婦人の政治的に覺醒し國家の政治に參與權を得るといふことは國家及び國民の前途に最も重要なる關係を有せるものであることを確信し、近き將來に於て我が國にもこの參政權問題をも解決すべき時期の來らんことを心から希望する。米國の婦人參政權問題はアンソニー及びスタントン兩女史の熱心にして撓みなき運動によつて解決された。兩女史は一八六九年婦人參政權法案を上下兩院を通過せしめ、以來最も熱心なる態度を以て社會

的理解に努力し、全國民の理解の下に女性の手を以てこの權利を婦人の手に確實に獲得させたのである。我が國には家庭に於ける婦人の地位の向上や社會に於ける獨立、民法に於ける改良や殊に廢娼問題の如く婦人の力に待つて解決せねばならぬ問題が甚だ多い。この點に於て吾々は我が國にも矢張かういふ熱心なる先覺者が婦人間に出てゝ婦人自らの手を以てこの問題を解決すると共に、國家も進んでこれに同情的援助を與へ、國民教育の一課目にこの問題を加へてその國民的達成を期せんことを希望して止まぬ。

凡て國家の歴史にとつて國民がその國家の政治に冷淡なるほど不幸なることはない。反對に國民自身がその國政に熱心であるほど幸福なることはない。英國々民の強いのは凡ての國民がみなその國家の政治を理解し、英國々民の立場から國家の歴史解決に參與するを辭せぬからである。凡ての行動を英國々民の本來的發展、アングロ・サクソンの活躍から割り出して根強く國家の歴史をその國民生活の根柢から割り出して往くからである。英國殖民地の成功して居るのは彼れ等が到る處この精神で働き事業を建設するからであり、反對にラテン系統の民族の發展せぬのは、この精神氣魄なく、到る處射利僥倖の念を以て往くからである。而して英國々民にこの氣魄を徹底し、一人としてアングロ・サクソンの優越を考へぬものなきに至らしめたる政治には諸種の原因があるが、要するにその國民的政治の自治が徹底せる代議制度をとり、この制度の下に國民全體がその政治に參與するにある。勿論英國の議會に於ても墮落史はあるが、近世の隆々たる國運を築いた英國議會では議員は熱心に國政に參與せんとする國民を代表して議場に臨み、個人の利己的慾望を超越して國家の永久的歴史發展の秩序の下に國政を審議する氣風をもつて居る。この氣風の中に英國隆盛の源を有して居るのである。

吾々日本國民も今日は少くとも勞働立法の自由によつて全國の勞働者、工場勞働者及び多數の農民に立法の自由を與へると共に、彼れ等をしてその自由の中に直接國家の歴史の本源に溯つてこれを永久に發展せしめ、現代を以て國家の永久的發展の階段に於て過去を承けて將來を作るになければならぬ意義あるものとならしめるに缺くべからざる最も重要なる職務を盡さしめねばならぬ。このためには彼れ等自身からいへば勞働立法の自由の下に既に述べた勞働權の道德的法律的確立及び勞働創作をなすべき必要がある。一體に今日の政治は世界一般に勞働の創作によつてこの自由を示すべき必要に逼られて居るが、殊に我が國に於ては一層特別の意味に於てその必要に逼られて居る。吾々は今日國民の勞働能力を增進し、その創作を發揮せねばならぬ時代になつて居る。これを前に述べたる語を以ていふならば勞働の Privatinitiative を示すべき時代となつて

居る。自由に於て吾々は國民として本源的に結合し、それ〴〵國家の本來的歴史を特殊の方法によつて作るべき點については既に述べたるが、この本源的歴史の發展は今日は現實的具體的にはこの創作によつて示す外ないのである。隨つて吾々は現在國民として有すべき唯一の職務は實際的にかゝる創作性を養成すべき國民教育に歸着する譯であつて、自然前に述べたる學校の個性及び個性の教育が自覺ある國民の職務として要求さるべきことゝなる。

只教育史的考察に於てかゝる問題が現代の問題であるといふのみでなく、國民的個性の當爲問題として現實的に要求さるべき問題となる。前に述べたる語を以ていふならば「事行」として我の絶對的創造活動が要求さるべきであるが、この活動に於ては只人間の生活は本來かくあるべきものであるといふやうな一般的努力ではなく、この事物、この生活は本來かくあるべきものであるといふ當爲の具體的命令を有して居る。現代の國民生活の問題を如何にすべきか、具體的に國民の歴史的生活について當爲の具體的命令を有して居る。この創造命令の中に於ては吾々の住つて居る土地の自然も直接國民の理想を實現すべき手段である。否、手段であるといふよりも本來個性が自己を實現するために作つた唯一の存在として國民の歴史になければならぬ本質的要素である。

既に述べたる如く國民的個性の歴史では個人のうちに唯一の永久的理想が自發的に現はれて生活となり、而も常に新らしき形態として現はれ、決して同じものを再び示すことはない。感覺的自然とは全く獨立に自己自身の立法によつてその生活を發展し、一口にいふならば感覺的個性に規定せられるところなく、却つてこれを規定し、純粋にラスクもいつて居るやうに自己規定の理想的個性を示して來る。創造性といふのが卽ちこれである。

余は前に我が國の神話に二神が大八洲を產んだ神話のあることを述べたが、吾々は國史の本來に於ては國土すらも作つて往く。與へられたる自然としてこれに規定せられるのではなく、徹頭徹尾これを規定しながら國民の理想を徹底し、これを以てその永久的理想を發表せる個性とする國民の永久繁榮はこゝに見られるのであるが、こゝでは國民の有すべき凡ての生活は本來かくあるべきものであるといふ個性の要求に基いて國民も國土も國家の唯一の個性として社會的に融合すると共に、その個性中に於て無數の個性がまたそれ〴〵異なれる方法によつて全體の歴史を固有の方法によつて作つて往く。只哲學的想像の上に於て作つて往くのではなく、事實の上に於て科學的に作つて往く。この國民的個性の立場に於て吾々は科學の研究を要求するが、その科學は當爲の體系として我が國の自然は本來かくあるべきであるといふ主張である。吾々は何處までも

凡ての問題を科學的に研究すると共に、又その研究の眞理によつて凡てを價値に改造すべきを要永する。國民生活全體は正に道德の創造性に基く一大合理的體系となるであらう。

併し省みてこの立場から我が國の實際を見るときは、吾々の正に慄然として恐懼すべきものがある。目下我が國の工業は凡て粗製である。精工業には到底も達して居らぬ上に、その粗製工業が又著しく不統一である。曾て或る人が東京大阪兩市の小賣店頭にあるところの一封度罐と稱せられるものについて調査したるに、直徑と高さとを異にするものが八十五種あつたといふことである。かくの如きは實に我が國工業の不統一を語る最も大なる材料となるものであつて、恐らくこのために資本と勞力と時間とを浪費して居ること驚くべきものがあるであらう。勿論この種の不經濟は獨り我が國にのみ見るのではない。科學的處理法によつて無駄を省くに最も鋭意力を竭くせる米國でも見るところである。數年前同國商務鄕フーヴァー氏の調査したるところによれば各種の工業を通じて四九%の無駄か行はれて居ることが判つたといふ話である。機械工業の大進歩によつて無駄のない大量生產の行はれて居る米國に於てなほ且つ然りであるから、我が國などに於てはどれだけの無駄が行はれて居るか殆ど想像のつきがたきものがあるであらう。米國はこの無駄を救うて年々百億弗を下らぬ國富を增加したといふ話であるが、恐らく我が國などではどれだけのセーブがあるか判らぬであらう。かゝる事實は吾々に我が工業界の大なる弊害たる製品の不統一を匡正するため諸種の努力をつくすべきを告げるものである。殊にその工業教育に於て全國的に不統一のあることを教へるものであるが、吾々はかゝる事實を省みる毎に科學が當爲の體系として國民の歴史を作るといふやうなことは容易に實現せられることではなく、前途非常に努力黽勉せねばならぬものあるを感ずると共に、フィヒテが「事行」に於て凡ての歴史を哲學的創造的に解決せんとして起つた氣概、ヘーゲルが國家問題を歴史の中心に置いた氣魄を懷ふこと更らに切である。吾々は本書の初め以來述べて來たやうに國史の前途には他の文明國にも增して幾多の困難を有するが、吾々はこの困難が前途に大なる障壁となつて横はれるを見れば見るほど益々大なる勇氣を以てこれに打ち勝つべき國民的個性のあることを思はざるを得ぬ。お互に起うではないか、起つべし吾々日本國民といふ唯この一片の耿々たる國民意識が吾々の凡ての問題を解決すべき力である。個性といつても一般に歴史哲學に於ていふところの個性、カント哲學の一般に對してフィヒテが初めに發見した個性はなほ歴史のフイクチオンをもつて居るから斯かる力ほないが、これから更らに進んで發見した國民的個性にはこの力がある。全く現實的具體的なる當爲としてこの力をもつて居る。吾々國民の問題は六ヶ敷くして俗眼をもつてするときは容易に

國民の職務について明晰なる見解を得られぬが、併し詮じつめて考へて見ればさう六ケ敷きものではない。只國民的個性を得よ、歴史に徹底してこの個性を得よといふのみである。この個性のあるところには吾々は必らず凡ての問題を理想的に解決する。吾々國民は須らく理想に活くべきである。

偖、然らば吾々は如何にして斯の哲學的國民的個性を養成すべきであらうか。勿論國史の教育によらねばならぬこと斷るまでもないが、教育の方法は既に前々章第三節で述べたるところでも明らかなる如く認識の方法によらねばならぬから、國史の教育に於てもナトルプが一般に教育の方法について述べたところの前に掲げた語、Der Wege sei alles, das Ziel nichts. といふことがその全體の眞理を掩ふものである。隨て國史の教育にあたつても何處までも歴史の論理に從つて一般的普遍的に進まねばならぬこと勿論である。この方法によつて進むところに吾々は既に前第二節でも述べたるやうに國家原理の進歩を得、進んだ意味の政治及び愛國者を得られる。楠公も實は斯くの如き意味に於て俗世的政治を超越した進歩せる永久の愛國者であつた。

國家及び國民は只この國史の認識による一般的進歩の中にその永久進歩を發見し得るのみである。併し吾々のこゝに最も注意せねばならぬのは、この歴史の認識による國民教育の永久進歩は既に個性の教育の場合に於ても明示してあるやうに畢竟方法論的眞理を示すものに過ぎぬのであるから、歴史の教育は徹頭徹尾この方法によつて進むもの、其理想となるところの一般的普遍史を以て國史の終局すべき實在的根據と考へてはならぬことこれである。此普遍史では何等個性もない人間性一般の普遍的價値體系を組み立てるものとなり歴史として正に一個の幻覺にしか過ぎぬものとなると共に、國民教育も幻覺に陷る。

併し歴史のこのフイクチオンは吾々には容易に脱せられぬものであつて、現にリツカートでさへもこの缺點に陷つて居るところがある。リツカートは歴史の認識に於ける普遍史的な空虚の一般的概念が不幸にして今日の多くの哲學者に大なる刺戟を與へて居るといつてその方法論的眞理の徹底せざることを嘆じて居るが、その氏にも既に述べたる如く超越的當爲と論じ、國民的倫理を論ずる場合に於てこの幻覺を脱せぬものがある。吾々まさに最も大なる注意を歴史の認識に對して拂はゞならぬが、余の寡聞なるを以て見るときはこの點は獨逸の歴史哲學界よりも我が國に於て一層甚だしいやうである。多くの人々は歴史哲學に於て個性を論ずるけれども實は自然科學的概念構成の極限として個性を考へ勝ちである。隨つてその個性なるものは既に屢々述べたる如く全くエンヴ學派の實在の如く抽象的想像的個性たるに止まつて居ることが多い。これが歴史哲

學の思想及び研究が今日可なり廣く社會に廣まり哲學界の中心となつて居るに拘らず、國家問題國民問題が動もすれは學者から敬遠せられ、甚だしき場合に於てはかくの如き問題は人間の歴史的發展過程に於ける一過程に過ぎぬ。これを以て實在と考へ、人間の永久目的と考へる如きは全く一個のフイクチオンに過ぎぬといふやうな考察をすらなすものがある。

曾て人類は偏狭なる國家觀念を抱き、自己の國家及び民族を以て世界の最上に位するものであるを抱いて居つた時代に比較するときは、この驕大思想から解放して人道的平等主義に則つて世界の人類と協同して人道的平和的歴史を作るべきを知るに至つたといふことは大なる進歩であるといはねばならぬ。隨つてこの國際的一般的運動と共に教育界に於ても國家主義的思潮の訓練から國際主義的思潮の訓練に進んだことは吾々の最も欣ぶところである。國家及び國史の進歩は前節に述べたるやうにこの點に於て見られる。併し既に前節でも注意したるやうに吾々はこの一般的國際的運動に對し歴史の普遍論者の想像して居るやうに人類は一樣に國家史の立場を去つて國際史の立場に進むべきものであると考へるならば大なる謬りである。普遍的價値の歴史といつても所謂超越的先驗論の立場に於ける歴史として眞の歴史の意味を失ひ、その概念は自然概念とあまり異ならざるものとなり、何時の間にか自然主義が社會に跋扈するやうになる。歴史に對する努力、國民として國家に對する態度に眞面目を缺き深刻味を失ふに至ることは斷るまでもないところである。全く人間の文化的原子論に陷りその具體的倫理的努力を失つた一般的文化の幻映を渇望せる生活となる。家族がどうであらうと又近隣に何事があらうと一向構ひなく、何時も祭りのやうに着飾つてぞろ〳〵と散歩見物に出掛ける習俗は、今日我が國の都市から次第に田舍に滲み渡りつゝあるが、これは正にこの具體的倫理の努力を失つた一般的文化の幻映を追ふ幻覺者である。

我が國に於てかく文化の幻覺を生ずるに至れるにはその由て來るところが深い。既に述べたる如く我が國は明治維新以後一般に歐米の文化を模倣し、これに達せんために只管努力した。このために吾々國民は統一的に文化の發達を見たることは甚だよいことであるけれども、而もその文化は只歐米の文化を模倣して一日も早くこれに達するにあつて、それ以上に國民の眞の自覺がなかつたから、自然その文化運動なるものは只一般を目的とする啓蒙運動となり、凡てが外國化するのみであつた。尤もその中にも次第に國民的自覺心を起こさぬではないけれども、反動的に起こさせたものであつて歴史哲學の眞理からいふときは論ずるに足らぬ狀態で今日まで進んで來て

居る。故穂積八束博士は明治四十四年七月全國の中等學校教員講習會に於て國民道德について講演されて居るが、それによるときは國民道德といふのは人間のもつべき一般道德に對する特殊道德であるといふやうに解されて居る。今その一節を擧げて見ると「元來國民道德と云ふは國民たる資格に伴ふ道德の意味であります。是は特殊の道德觀念を意味するものである。國といふ觀念なくしては此道德觀念はないのであります。若しも唯人間といふ觀念のみあつて、國といふ觀念なくんば起こらざる所の道德である。それ故に是は特殊の道德觀念であります。」とある。これによるときは博士は一般道德と國民道德とを別に考へ、一般道德が現實的具體的には只國民的個性の道德としてのみ見られる當爲實在であるといふ國民の哲學的自覺に達して居らぬものと見ねばならぬ。この博士のごとき考へ方は我が國の今日に於ても猶ほ强き勢力をもつて居るのであつて現在專門の教育學者の中にも矢張かういふ誤解から教育を論じ、一般的文化によつて教育の目的を決定する外ないが、國民教育は國史の教ふる事實によりて遣らねばならぬといふやうに論ずるものがある。併しこれは學者としては無見識な話である。常識的に考へるときは教育の理想には時代と場所とに制約せられた特殊の理想とこれを超越した理想一般とを區別して考へねばならぬ隨つて文化史一般と國史とは區別して考へねばならぬ。併しこの見方に於ては文化史一般を以て國史以上の價値と見るから、歴史の認識によるときは國史は一般文化の中に止揚せられ、教育の目的としては一般文化をとらねばならぬことゝなるが、この一般文化史は余のこれまで十分述べて來たやうに一個のフイクチオンにしか過ぎぬのである。設令かゝる場合に國家は獨自の價値をもち、國史は固有の立場をもつからといつて、教育のこの一般的幻覺化を避けたところが、それは只言葉の上だけのことであつて、事實の上では承認されぬ。獨自の價値をもつためには一般を特殊の形式の下に實現し、換言すれば特殊を以て一般を實現せるために價値あるものとせねばならぬが、この見方が既にも述べたる如く個性の見方として甚だ不徹底なものであり、なほ一般に對する幻覺を脱せぬものであつて、個性の獨自とはいひながら一般に止揚さるべき運命を免れぬかゝる立場で國史を考へるに止まるから、教育上に於て國史及び國家の價値の重要なるを說いても、その言下から一般的文化の幻覺を崇拜するものを生じ、既にも述べたるやうな弊害を簇生する。一般的文化原理と特殊的原理とを調和するところに吾々の教育があるといへば、如何にも尤もらしく聞えて一見人耳に入り易いが、その實最も危險なるものである。吾々は我が國民教育のため人々の十分反省せられんことを希望する。

勿論既にも述べたる如く吾々の國史は一般的文化原理によつて啓蒙せねばならぬ。くどいやう

であるが教育の方法が認識の方法と一致する以上この道筋は無限に通ずべきものとして吾々は何處までもこれに從つて進んで往かねばならぬ。これが先驗的認識の吾々に命ずるところである。これに從ふところに國家原理の進歩のあることは既に述べたるところであつて、國史の國際的發達といふことも結局この歴史の認識の論理によつて進歩するものである。この意味に於て吾々は一應國家は一般的文化の課題をもつものといへるが、この歴史の論理の示すところではその課題の極限に於て國家の文化の理想として吾々は價値の普遍的體系を目的とするものとなり、文化一般若しくは抽象的文化を目的とするから、現實具體的には何等の文化事實をもつことが出來ぬ。文化の對象性を發見することが出來ぬ筈である。こゝにこの議論にはなほ大なる缺點があるが、これは所謂先驗的超越論による以上は既に述べたる如く止むを得ぬところの缺點である。吾々はこの論の立場から先驗論理の立場に出でゝ、この文化價値一般をすら内容として發生するところの我の絶對を發見せねばならぬ。こゝに對象性のない一般的文化も絶對的個性の對象としての文化となる筈である。文化の課題及び事實としての文化は本來こゝに見られるのであつて、こゝにフイヒテの「事行」の哲學があることは既に屢々述べたるところであるが、歴史哲學からいふときはこれでもなほ文化及び個性にフイクチオンがある。このフイクチオンを脱して名實共に現實的具體的に文化及び個性を發見したのは、この先驗論理の社會性から國民論理を發見したる後のことであつて、フイヒテの哲學では晩年のことに屬する。

フイヒテはカントの一般を超越して個性を發見した哲學者であつて、既に述べたる如く歴史哲學に於ては最も重要なる地位を占める學者であるが、そのフイヒテも只先驗論理によつて絶對的個性を發見したるに止まつて居つたときは、なほ何處かに一般的歴史について幻覺を抱き、ナポレオンの世界征服に對して頌德表を奉るほどであつたが、この論理から國民論理を發見し、個性は國民的個性であつて、この外に道德法が現實的具體的に存在して當爲の命令をもつべき立場がない、國民的個性が唯一の當爲實在であることを發見してからは人も知る如き愛國哲學者となつたのである。人は國史と一般史との差異などは歴史に對する見方の違ひであつて、事實問題としてはどうでもよいといふかも知らぬが、この見方の違ひがやがて斯くの如き生活態度の差異を生じ、吾々は既にも述べたる如く道德の現實的具體的當爲などには一向關係なく、一般的抽象的文化を求める幻覺的虚榮的生活をするか、或は又眞の愛國者として最も進歩せる意味に於て國家及び人道の永久繁榮のために努力する人格者となるかの區別を生ずる。余はこの點について國家並びにその政治家教育學者及び實際教育家が十分反省せられんことを希望して止まぬ。

偖、余は以上永く國史及び國民教育の本質について論じたが、要之、吾々はこれ等の問題については何處までもその徹底を求めるにある。少くともこの徹底を求める態度の中に吾々はこれ等の問題の正當なる解決を期待せねばならぬ。恐らく吾々は國民として現在その家をどうするか、國家をどうするかといふことについては直覺的に或る目的を有して居るであらうと思ふが、吾々は思索の徹底によつて只この原始的直覺に對して哲學的根柢を與へ、當爲の科學的體系にこれを開展するところに、吾々の唯一の職務があるのであつて、この開展によつて吾々は具體的に人間としてもつべき唯一の現實普遍史としての國史を作る。吾々の生活及び歴史は只この方法によつて進歩し得るのみである。吾々には只この哲學的自覺の國民的個性が尊い。楠公がこの認識によつて國家を永久に救ひ、この國土に道德法を永久にたもらしたことは既に述べたが、神の暗示と福音とを得たルーテルが人類を救はんとして先づ獨逸國民を救ふたのもこの意識によつたのである。

ボーロがクライストの教を以て普遍的人類的に解したゝめに基督教は世界的に擴がり永久的に人類の宗教となつたことは事實であるが、これはボーロがクライストの宗教的意識を反省して其普遍なるを承認したからであるが、ボーロ自身にはなほこの反省の奥に於てクライスト我に於て活くといつた態度の中に、これがクリスト教だといふ活きたクライストがあつた筈であつて、このクライストの活きて居る宏大無邊の立場が眞の猶太國民のキリスト教であつたことを忘れてはならぬ。この立場が凡ての國民にクライストを信ずる故にそれまで知らなかつた高尚な意味に於て直覺的にその同胞國民にその永久を與へたから、クリスト教は世界中に繁榮するに至つたのである。クリスト教は國民の態度をすてゝ人間といふやうな抽象的概念に人類の生活を枯死せしめたのではなく、直覺的に國民の眞の立場を自覺せしめ　これによつて人類をこの地上生活に於て現實的に救濟したのである。宗教が超國家的であるといふが、この超國家的であるといふ論理の根柢には實は人をして直接人道のために起たしむべき具體的國民的道德の體驗がある。この國民的體驗は凡ての反省の根柢にあるから會々人々の意識するところとならぬのみであるが、こゝに吾吾の生活の一切の根源が具體的に備はつて居る。フイヒテは精神的性質は人間の本質を國民に於て最も多樣なる階段に發展せしむるといつたが、余はこの語を以て本書の論文を終へると共に、吾々同胞國民に對して、唯吾々國民は道德に活くべしといふ語を捧げたい。クライストは神は人の行爲を義としてこれに無限の祝福を與ふべきことを說いたが、吾々人間の生活は結局只德義に感鳴し、直覺的にこのために起つ點に於て凡ての歴史を解決すべき一般的形式として國民の政治

的秩序を正すと共に、更らにその根柢に於て國民教育を要求し、それから人道の無限に變化ある個性の花を國史の上に咲かしめる。

大正十四年三月一日印刷
大正十四年三月五日發行

定價金三圓五拾錢

著作者　大西友太
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地
印刷者　堀江關武　東京市小石川區諏訪町五十六番地
常磐印刷所印刷

發行所　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地　振替口座東京二八〇番　東京寶文館
關西專賣　大阪市西區阿波堀通四丁目　振替口座大阪四三番　株式會社大阪寶文館

東京實文館發行書目

文學博士上田萬年閲　國語師範校長橋本文壽著
神道の現代的研究　布裝　定價金四圓五拾錢　一冊　送料金十八錢

靜岡師範訓導　渡邊茂雄著
教育思潮の批判に立る **國史教授の本質的研究**　布裝　定價金二圓八十錢　一冊　送料金十八錢

廣島高師訓導　菊地勝之助著
現代國史教授の諸問題　布裝　定價金二圓三十錢　一冊　送料金十二錢

山梨師範教諭　石野悌著
思想を背景とする **西洋史綱**　布裝　定價金三圓六十錢　一冊　送料金十八錢

文學士　島田增平著
學生參考 **日本歷史詳解**　布裝　上卷一圓四十錢　下卷二圓三十錢　二冊　送料各十二錢

廣島高師訓導　菊地勝之助　中山榮作共著
尋常小學國史教授書　和裝　上卷一圓五十錢　下卷二圓八十錢　二冊　送料各十二錢

文學博士　吉田靜致閲　國語師範校長　橋本文壽著
哲學の要領　布裝　定價金二圓二十錢　一冊　送料金十二錢

東京實文館發行書目

明石女子師範教諭　山島吉五郎著
訂補新版〜〜參考 **動物學講義**　布裝　定價金三圓八十錢　一冊　送料金十八錢

理學博士　齋田功太郎　佐藤德介共著
改版〜〜參考 **植物學講義**　布裝　定價金四圓五十錢　一冊　送料金十八錢

文學士　保科孝一　閲八雲中學校長　横谷眞吉郎著
國語教授と眞教育　布裝　定價金三　圓　一冊　送料金十八錢

福岡師範教諭　栗田鼎造著
詳しくてわかり易い **鑛物の鑑識法と教授の實際**　布裝　定價金三圓二十錢　一冊　送料金十八錢

農學博士　横井時敬閲　小學校補習學校適用　片岡重助著
最新農業教授大資料　布裝　定價金六圓五十錢　一冊　送料金三十錢

綾原小出兩醫學官監修　畠山鋼榮藏著
文部省新制定 **公民科教授要綱解說及資料**　布裝　定價金三圓八十錢　一冊　送料金十八錢

理學士　石原初太郎著
文化と自然科學　布裝　定價金二圓三十錢　一冊　送料金十二錢

東京寶文館發行書目

芦田正喜　池田茂二　大武美德共編
新撰文化讀本　洋裝上中各九十錢　下金八十五錢　三冊送料各六錢

芦田正喜　小笠原藏共著
實演
少女劇脚本集　洋裝定價金一圓五十錢　一冊送料金八錢

兵庫縣體育主事　矢島鐘二著
スポーツマンの精神　布裝定價金二圓三十錢　一冊送料金十二錢

海軍々醫大尉林良齊著
改訂增補
體育論　布裝定價金三圓八十錢　一冊送料金十八錢

吳高女教諭　大林惠美四郎著
體驗改造
競爭遊技の新教材　布裝定價金二圓　一冊送料金十二錢

理學士　石原初太郎著
實驗を主としたる
自然地理學概論（增訂第二版）　布裝定價金五圓五十錢　一冊送料金十八錢

理學士　石原初太郎著
普通教育
實驗地理學通論　洋裝定價金一圓八十錢　一冊送料金八錢

532
91

終